

# 三井記念病院

百年のあゆみ

# 創立100周年を迎えて

三井記念病院は平成18年(2006)10月3日に創立100周年を迎え、その記念事業として取り組んでいる新病院建設計画も第1期工事が竣工の運びとなりましたことを地域の皆さまをはじめ関係者の皆さま、そして三井グループを挙げて慶びたいと思います。

明治39年(1906)に三井家による社会福祉事業として100万円の寄付によって設立された三井慈善病院は、診療業務を東京帝国大学医科大学に委託し、各科の課長に東京帝国大学医科大学教授、助教授、講師を迎えるなど、当初から高度な医療レベルを誇っておりました。もともと東京帝国大学医科大学の前身である東京帝国大学医学部は、天然痘に苦しむ多くの小児を救うため82名の蘭学者がお玉ヶ池に開設した種痘所に始まります。

当院はこの精神を受け継ぎ、開院当初から生活困窮者のみに診療を行い、診療費は無料としていました。その後、財団法人泉橋慈善病院、財団法人三井厚生病院、社会福祉法人三井厚生病院、そして現在の社会福祉法人三井記念病院へと改組・改称し、三井グループによる社会貢献事業の柱の一つとして運営されております。これら100年の歴史において一貫した社会福祉の精神に基づき、高度な医療を絶えず提供してまいりました



平成21年 3月

**理事長 田中 順一郎**

ことが当院の大きな特色となっております。

この間、昭和45年(1970)4月には、三井グループ各社の支援により地上13階の新病院が完成し、当時「東洋一の高さを誇る高層建築病院」として話題となりました。昭和55年(1980)4月に第2期工事、昭和58年(1983)4月に第3期工事が完成しましたが、これらの建物も老朽化が進み今回の全面建替えに至っています。

この度オープンいたしました入院棟の建設に際しましても、三井グループ各社から多大なるご支援を賜るとともに、工事期間中は地域の皆さまのご理解を得て順調に工事が進められ、無事完成の運びとなりましたことを心より御礼申し上げます。

今回、100年という一つの節目を記念して小史を発刊することとなりましたが、当院の歴史資料は昭和20年(1945)3月10日の東京大空襲により、そのほとんどが焼失しておりました。しかし、幸いにも三井文庫や三友新聞社の資料を中心として、体系的にまとめることができ、当院が絶えず「社会福祉の精神」を貫き、時代の要請に応える高度な医療を提供してきた歴史を再認識し、今後も当院の運営を三井グループによる社会貢献活動の柱の一つとして、社会の発展に寄与していきたいと考えております。

# 後世に残る社会奉仕

明治39年(1906)に当時の三井11家総代・三井八郎右衛門(高棟<sup>たかみね</sup>)が100万円を寄付して設立認可を申請した財団法人三井慈善病院は、三井グループ各社による支援のもと一貫した社会福祉の精神に基づいた高度な医療を提供し続け、平成18年(2006)10月3日に創立100周年を迎えました。

創立当時は貧困のために医療を受けられない人が多く、これらの人たちに高度な医療を無料で提供することは、日本の近代化を進めるための労働力の確保につながりました。このため三井記念病院の創立は日本の近代化を支えるために非常に有意義なものであったと実感しています。

現在までの道程には関東大震災や東京大空襲など困難な状況も多くありましたが、開院当時は内科、外科、眼科、耳鼻咽喉科、皮膚病科の5科、120床だった病床数も現在では30科、482床へと拡張しています。当初から医師の育成や看護師の養成にも努めるほか、入院・外来の患者には相談所を開設し、多くの悩みに応えてきました。こうした中で、開院後に皇后陛下行啓、多くの皇族殿下の台臨を賜りましたことは、入院患者や職員の大きな励みとなったことと思います。



平成21年 3月

評議員会議長 **三井** ひさしげ  
**長生**

また、当院は藤堂和泉守(伊勢国津藩、現三重県津市)上屋敷跡である現在の東京都千代田区神田和泉町に建設されましたが、藤堂家が治めた津は三井家の家祖・三井高利の生誕地である松阪に近い場所にあります。さらに神田和泉町は高利が江戸で呉服店・越後屋を開いた本町一丁目(現日本銀行新館の一角)と至近距離にあるなど、この神田和泉町には、三井グループが社会貢献事業を行うに相応しいご縁を感じています。

この地におきまして平成23年(2011)12月、三井記念病院はさらに高度な医療と快適な療養環境を提供する新たな施設に生まれ変わります。昭和55年(1980)の建替えに続くもので、今回も三井グループ各社から多大なるご支援を賜りましたことを、ここに厚く御礼申し上げます。

今回の記念史により、三井記念病院が行ってきた社会への奉仕が記録として後世に伝えられ、今後ますます社会に貢献できる病院として発展していく一助ともなれば幸いと存じます。地域の方々、三井グループ各社の関係者をはじめ、皆さまには今後とも、なお一層のご支援とご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。

# 発刊にあたって

三井記念病院は、明治39年(1906)に設立が決まり、最初の病院が明治42年(1909)に完成いたしました。当院が設立されてから1世紀、19世紀から20世紀というように時を経た世紀の重みを感じずにはられません。

この100年史を発刊するに当たり、まず困ったことは、第2次世界大戦のため、明治、大正、及び昭和20年(1945)までの資料がほとんど焼失していた事であります。その中であって、三井文庫に『財団法人 泉橋慈善病院三十年略誌』があることが分かりました。これには創立当時の社会状況、病院の正面写真、病院の見取り図、病室の写真、創立以来30年間の医師の名簿、患者数、会計などが詳細に記録されておりました。また、終戦後の混乱から病院再建に努力された荷見晋氏(元三井不動産)が、『三友新聞』『東京大学医学部百年史』の中で当院の歴史に関して述べておられる箇所も、今回の100年史編集にあたり、大いに参考にさせていただきました。

また、戦後より長く当院に勤務され、副院長でもあった清瀬 闊<sup>ひろし</sup>先生が、終戦後の思い出を寄稿してくださったことは望外の幸でした。

『財団法人 泉橋慈善病院三十年略誌』の中に、中国の革命史に名を残す魯迅が敬愛してやまなかった「藤野先生」(藤野巖九郎氏)が、一時期、当院耳鼻科に勤務されたこと、



平成21年 3月

## 院長 萬年 徹

また作家の吉村昭氏のノンフィクション『破獄』を読むと、主人公の脱獄囚が刑期を終え就業したあと当院で生を終えたことなど、調べてみると興味深い事実がありました。このような歴史はさて置き、当院が東京の地にあって、着実な医療を行い、今日を迎えるに至ったことを考えますと、この病院を支えて下さった諸先輩方のご尽力に深く感謝しなければならないと思うものであります。

この1世紀の間、病院を支えてくださいました三井家、さらには財閥解体後の経済的困難さを救うため、陰に陽に当院をお助け下さった三井グループ各社の御力添えがあったればこそ、当院が現在、世の評価を受けるようになったのであります。

さらに、この病院で骨身を惜しまず日夜、医療、医事に懸命に働いてきた職員の努力が、この100年の歴史を生み出すに至ったと思わざるを得ません。

100年記念を迎え、さらなる新しい医療の場として新病院が発展し、次の100年に向かって進むことを切に願うものであります。

# 医療理念

三井記念病院は全人的視点に立ち

最新・最良の医療を提供し社会に貢献します



三井記念病院入院棟(平成20年9月竣工)



# 目 次

創立100周年を迎えて	理 事 長 田中順一郎
後世に残る社会奉仕	評議員会議長 三井 長生
発刊にあたって	院 長 萬年 徹

## 本 編

### 序章 創立前史

#### 1. 種痘所の開設

福祉の精神と高度医療	14
「お玉ヶ池」と「神田和泉町」	14

#### 2. 東京帝国大学医科大学附属第二医院跡

種痘所から第二医院へ	16
第二医院の全焼	18

### 第1章 三井慈善病院の創立

#### 1. 社会福祉へのアプローチ

慈善病院設立の経緯	19
安定した病院運営を目指す役員顔ぶれ	20
三井慈善病院開院式	22

設立時の財団法人三井慈善病院概要	23
高度な医療レベルが一世を風靡	25
社会福祉の一大事業に脚光	26
三井高棟一行の欧米視察	28
社団法人同愛社と協定	28

## 2. 医療レベルの高度化と附属機関の充実

医師補習教育の実施	28
附属産婆看護婦養成所	29
泉橋慈善病院賛助婦人会	30
病人相談所の開設	32
三井家の寄付	32

# 第2章 大正時代～昭和時代

## 1. 苦難の大正時代

三井慈善病院から泉橋慈善病院へ	34
『躋民寿域絵巻』	34
関東大震災を乗り越える	37
風水害で特別診療	39

## 2. 皇族の患者慰問

皇后陛下が初の行啓	39
関東大震災に際しての行啓、台臨	42
国務大臣及び宮内官の視察	42

### 3. 激動の昭和期

創立30周年記念式挙行	42
泉橋慈善病院から三井厚生病院へ	43
東京大空襲	43

## 第3章 戦後復興への道

### 1. 焼け跡からの出発

荷見理事に託された病院再建	45
建物と資金の調達に奔走	46

### 2. 財団法人から社会福祉法人へ

戦後初の新病棟が竣工	47
------------	----

## 第4章 再び高度医療を

### 1. 最新の医療病棟建設へ

第1期工事始まる	50
第1期工事出資26社	52
B C棟竣工、東洋一の高層病院に	52
三井記念病院高等看護学院を開院	54
三井建設で血液検査のデータ処理	56

### 2. 第2期工事に向けて

三井グループ50社からの寄付	56
第2期工事出資50社	57

D棟に看護学院を併設	58
「三井の天使」を除幕	59

## 終章 21世紀の最先端医療へ

### 1. 建替え工事計画を推進

総合健診センター、三井陽光苑をオープン	60
建替え工事計画を発表	61
三井記念病院建替え工事出資27社	61

### 2. 医療活動を続けながらの建替え

総事業費200億円の大計画	62
地上19階の入院棟完成	63
次の100年に向けた高度医療	65

### 寄稿

戦後の三井厚生病院(三井記念病院元副院長 清瀬 <sup>ひろし</sup> 闊)	67
---	----

## 資料編

歴代理事長・評議員会長	72
歴代院長	73
役職員	75
病院概要	78
B C棟フロア図	85
入院棟フロア図	86
年表	89
主要参考文献	93

# 本編

## 凡例

1. 本史の記述は、原則として平成21年1月までとした。
2. 本文は原則として新かなづかいを用いた。
3. 数字は固有名詞を除いて原則としてアラビア数字を用いた。但し、引用文は原文のままにした。
3. 人名は原則として敬称を略した。
4. 役職名は原則として当時のものとした。
5. 「評議員会長」は平成20年5月から「評議員会議長」に呼称変更した。

# 序 章 創立前史

## 1. 種痘所の開設

### 福祉の精神と高度医療

社会福祉法人三井記念病院は、三井家による100万円(現在の約10億円以上ともいわれる)の寄付により、無料診療を行う民間唯一の病院として明治42年(1909)3月21日に開院した財団法人三井慈善病院を前身としている。この三井慈善病院は東京帝国大学(現東京大学)医科大学附属第二医院跡に建設され、各科医長は同医科大学教授、助教授、講師が就任するなど、同医科大学と深い関係があったため、まず同医科大学の概略を述べるところから本書の叙述を始めることとする。

東京帝国大学医科大学は、現在の東京大学医学部の前身にあたり、創立は安政5年(1858)5月7日とされている。これは、当時の江戸お玉ヶ池に種痘所が開設された日にあたる。この種痘所は蘭学医に好意的だった勘定奉行・川路聖謨<sup>かわじとしあきら</sup>の屋敷の一部を借りて開設された。外国からの医術を禁止していた幕府を動かし、種痘所設立へ導いたものは、長崎で多くの蘭学者を育てたシーボルトの弟子である大槻俊斎、伊東玄朴ら蘭学医たちの熱意であった。事実、種痘所開設により天然痘に苦しむ多くの小児が救われている。また、種痘所は医学を志す若者の教育機関としての役割も果たした。蘭学医82名の出資により設立された私的機関は、やがて幕府に接收されて西洋医学所となり、維新後も明治政府に引き継がれ、幾度かの名称変更を経て、現在の東京大学医学部に至っている。

### 「お玉ヶ池」と「神田和泉町」

桜ヶ池とも呼ばれ、不忍池よりも大きな池であったと伝えられる「お玉ヶ池」の名の由来は、かつて2人の男性からの求愛に悩んだ神田松枝町のお玉が身投げしたという伝説による。現在、都営地下鉄岩本町駅から小伝馬町駅に向かう東京都千代田区岩本町

2丁目5番9号の鰻屋「ふな亀」入口の前の歩道に「お玉ヶ池種痘所 東京大学医学部」の標柱と医学部発祥の由来を刻んだ黒御影のレリーフがある。これは昭和36年(1961)11月3日に東京大学医学部が建立したものであり、記念碑の除幕式では地元の木遣り歌の歓迎があったといわれている。



東京大学医学部が建立した記念碑

このレリーフには次の文字が刻まれている。

一八五八年・安政五年五月七日  
江戸の蘭學醫たちが資金を出し  
あってこの近くの川路聖謨の屋  
敷内に種痘所を開いた。これが  
お玉ヶ池種痘所で江戸の種痘  
事業の中心となった。ところがわ  
ずか半年で十一月十五日に類焼  
にあい下谷和泉橋通へ移った。  
この種痘所は東京大學醫學部の  
はじめにあたるのでその開設の  
日を本學部創立の日と定め一九  
五八年・昭和三十三年五月七日  
創立百年記念式典をあげた。  
いまこのゆかりの地に由来を書  
いた石をすえまた別に種痘所跡に  
しるしを立てて記念とする。

一九六一年十一月三日  
昭和三十六年文化の日  
東京大學醫學部



お玉ヶ池種痘所跡の碑



東京帝国大学医学部附属第二医院所在地図(明治16年)

また、現在三井記念病院が建つ神田和泉町にはかつて藤堂和泉守上屋敷があり、藤堂家が代々名乗っていた「和泉守」から町名が「神田和泉町」になったとされる。明治維新後、新政府はこの屋敷跡地に東京医学所を設置した。藤堂家が治めた伊勢国津藩(現三重県津市)と三井家の家祖・三井高利

が生まれた伊勢国松坂(現三重県松阪市)、三井記念病院が建設されている藤堂家跡地(現東京都千代田区神田和泉町)と高利が開いた呉服店・越後屋(現東京都中央区日本橋本石町＝日本銀行新館の一角)は、いずれも非常に近い距離にある点に深い縁が感じられる。

## 2. 東京帝国大学医科大学附属第二医院跡

### 種痘所から第二医院へ

開設から半年後の安政5年(1858)11月15日、早朝に神田相生町から出た火事により種痘所は類焼し、その後、蘭学医たちの募金によって翌年下谷和泉橋通り旧藤堂和泉守上屋敷北(当時伊東玄朴邸の一部)に仮小屋を建てて種痘事業を継続した。万延元年(1860)10月14日、幕府はこの種痘所を直轄とし、官立種痘所の初代頭取に大槻俊斎が就いた。官立種痘所は文久元年(1861)10月25日に「西洋医学所」、文久3年(1863)2月25日に「医学所」と改称した。文久2年(1862)4月9日に大槻俊斎が死去すると、第2代頭取に緒方洪庵が命ぜられた。



緒方洪庵(1810~1863)は、医師・蘭学者で、天保9年(1838)、大坂(現大阪府大阪市)に適々齋塾(適塾)を開いた人物である。この適塾からは福沢諭吉をはじめ、大村益次郎、橋本左内、長与専齋などの人材が輩出された。また、緒方洪庵を慕い種痘所設立に参画した蘭学医の1人が適塾で福沢諭吉と同級だった幕臣・手塚良庵であり、その曾孫は漫画界の大御所・手塚治虫である。



東京帝国大学医科大学附属第二医院

明治元年(1868)7月20日に新政府は横浜の軍陣病院(野毛山軍陣病院)を下谷藤堂邸に移し、医学所をこれに含めて「大病院」と称した。明治2年(1869)2月、大病院は、「医学校兼病院」、「大学東校」へ改称された。この間、鎮将府、東京府、軍務局を経て明治2年(1869)1月に東京府の所管となった。明治4年(1871)7月18日、大学が廃止され「文部省」が新設された。大学東校は「東校」に改称され、所管は文部省となった。翌明治5年(1872)8月3日文部省は学制を定め、学区制を採用し東校は「第一大学区医学校」と改称され、明治7年(1874)5月7日には、学制



「臨時増刊風俗画報」が東京帝国大学医科大学附属第二医院を紹介(明治33年)

改革により「東京医学校」と改称された。この後、明治10年(1877)4月12日に東京帝国大学が創立され、東京医学校は東京帝国大学医学部となった。明治11年(1878)11月、神田和泉町(もと下谷和泉橋通)の大病院跡に東京帝国大学医学部附属医院を開き、通学生の臨床教育の場とした。明治15年(1882)7月1日、本郷の医学部附属医院を「第一医

院」、神田和泉町にあるものを「第二医院」として、両院に院長格を置いた。明治19年(1886)3月1日、帝国大学令の公布によって、東京帝国大学医学部は帝国大学医科大学となった。明治30年(1897)、帝国大学は東京帝国大学に、帝国大学医科大学は東京帝国大学医科大学に改称された。その後、大正8年(1919)2月に帝国大学令が改正され、東京帝国大学医科大学は東京帝国大学医学部となった。

## 第二医院の全焼



「風俗画報」が掲載した東京帝国大学医科大学附属第二医院火災の様子(明治34年)

東京帝国大学医科大学附属第二医院は明治34年(1901)1月29日早朝、消毒用ホルマリン洋灯から出火し、全焼した。入院患者96名中、焼死19名、驚死2名に及んだ。この惨事は斎藤茂吉の随筆『三筋町界限』にも記載されている。同地はその後、東京帝国大学医科大学の運動場となり、これを三井家は入手した。三

井家は、明治39年(1906)9月25日に、まず三井慈善病院を設立すべく診療業務、医術の研修及び看護婦の養成を東京帝国大学医科大学に委託した。

そして、お玉ヶ池種痘所の社会福祉の精神は、東京帝国大学医科大学附属第二医院を経て、明治42年(1909)3月21日に開院する財団法人三井慈善病院へと引き継がれていくこととなる。

つまり、東京大学医学部の創立は、わが国最初の広く一般大衆を対象とした公衆衛生活動といえる。三井記念病院は、この社会福祉の精神と高度な医療を受け継ぎ、平成21年(2009)3月21日に開院から100年を迎える。

# 第1章 三井慈善病院の創立

## 1. 社会福祉へのアプローチ

### 慈善病院設立の経緯

工業化の進展とともに日本国内では工場労働者が増加した。特に東京では貧困層が本所、深川地区に集中していた。社会保障制度も健康保険もなく、生活保護法もなかった当時のわが国の時勢において、医療を受けることができない貧困層の増大は社会不安のみならず、日本の将来を担う人材育成にも大きな影響を及ぼすため、国民の健康に対する施策が求められていた。

明治36年(1903)、当時の東京市長・尾崎行雄は市立病院の設立を計画し、同計画に賛同した三井家は、三井本館竣工の祝賀の意味も含め、東京市に10万円の寄付を行った。しかし、明治37年(1904)から始まった日露戦争の影響から計画は実行されず、明治39年(1906)になっても計画は実現しなかった。これに対して三井家では独力で施療病院設立を計画した。

三井家は、明治38年(1905)9月の日露戦争終結に伴い、ポーツマス条約が調印された1年後の明治39年(1906)9月に、戦勝を記念する意味も込めて「汎ク貧困ナル病者ノ為メ施療ヲ為スヲ目的」として、東京市内に施療病院を開設するため100万円を寄付し、これを維持基本金(基金)として、財団法人組織の慈善病院を設立することを決めた。三井家同族会議長・三井八郎右衛門<sup>たかみね</sup>(高棟、三井家総代、男爵)は、三井家同族会事務局管理部副部長・益田孝を設立委員長として、東京帝国大学医科大学教授・土肥慶蔵、岡田和一郎、入澤達吉、三井家同族会事務局管理部理事・朝吹英二の4氏に設立委員を嘱託し、同年10月3日に内務大臣より財団法人三井慈善病院設立の認可を得た。建設地は貧困により医療を受けられなかった人たちが医療を受けるために至便な、元東京帝国大学医



三井八郎右衛門(高棟)



竣工当時の三井慈善病院(三井文庫所蔵)

科大学附属第二医院跡である東京市神田区和泉町一番地(現東京都千代田区神田和泉町)としてすぐに着工した。建物は明治41年(1908)12月10日に竣工した。その後内部の設備を整え、翌明治42年(1909)1月25日に院内に仮事務所を設けて事務を開始し、警視總監から3月20日にその一部落成使用の認可を得て、3月21日

の春季皇霊祭日(現在の春分の日)に開院式を行った。

評議員会長には東京帝国大学医科大学長・青山胤通(医学博士、男爵)を選任し、院長には東京帝国大学医科大学教授・田代義徳(医学博士)を囑託した。これにより理事会が経営にあたり、患者の診療は東京帝国大学医科大学に委託して、無料診療を行う民間唯一の病院として3月22日から内科、外科、4月13日から眼科、5月14日から耳鼻咽喉科、6月7日から皮膚病科の一般患者の診療を開始した。開院当初は役員17名、職員44名だった。その後、大正15年(1926)に看護婦寮宿舎、昭和3年(1928)に研究室並びに標本室を、いずれも鉄筋コンクリート3階建てで新築している。

#### 安定した病院運営を目指す役員顔ぶれ

財団法人三井慈善病院は三井家の寄付により設立されたため、設立者には三井家同族が名を連ねたが、慈善病院という性格から運営にも最大の力が注がれた。即ち、三井家同族外から設立委員長に三井家同族会事務局管理部副部長の益田孝と同管理部理事の朝吹英二、役員として理事に益田孝、朝吹英二、田中文蔵、監事に成瀬隆蔵、有賀長文を抜擢した点で、病院運営を重視していたことがわかる。益田孝は旧三井物産の初代社長である。朝吹英二は福沢諭吉を師として慶應義塾を卒業後、三菱商会に入社したが、日本の工業化を進めた三井銀行常務理事の中上川彦次郎(福沢諭吉の甥)に抜擢されて鐘淵紡績の取締役、三井工業部、三井呉服店、王子製紙で要職を務め、発展に貢献した。

田中文蔵は旧三井物産文書、人事課長(後に取締役)を務め、成瀬隆蔵は三井家同族会教育部の主事、後に三井合名検査課の参与を務めるなど、いずれも優れた経営手腕を発揮した人材を病院の運営に当たらせている。また、有賀長文は国際法学者で早稲田大学教授の有賀長雄の弟で、東京帝国大学法科大学政治学科を卒業後、貴族院書記官、農務省商工局参事官、工務局長を務め、その後三井家の顧問を務めていた井上馨(元大蔵大輔)の側近として従事していたところを三井家に依頼されて三井家同族会理事心得に就き、後に理事に昇格している。



益田孝  
(三井文庫所蔵)

さらに現場担当者として三井信託文書部と不動産部の部長兼副社長を務めた船尾栄太郎を2代目の事務長に起用した。三井合名に再三基金の増額を要請しながら、少ない予算の中で病院の経営を実質的に担った。初代院長の田代義徳は船尾栄太郎の没後「船尾君は本当に苦勞された。この点だけでも故人の功勞は永く記念しなければならないと思う」と追悼談を残している。これに加えて船尾栄太郎は「この病院に来る人は金がなくて困っている上に、病気が心配で心が小さくなっているから親切に取扱って下さい。なるべく大声を出さぬこと。決して怒らぬこと」と繰り返し従業員を指導した。

また、船尾栄太郎は身寄りのない婦人を看護婦養成所に入学させたり、養成所の模範生が肺炎を患った際には転地療養の費用を提供したりした。さらに成績優秀な生徒のために尽力し、三井家の夫人から学費を寄付してもらい、その生徒を歯科医学校と女子医学校に入学させている。看護婦の錦谷礼利は「患者の中には退院しても働けず、家に戻れば直ちに食べるにも困る様な人も少なくなく、先生は人知れずポケットからお金を渡されることもしばしばでした」と語っている。

これらの点からも東京帝国大学医科大学に委託した医療レベルの高さに加え、運営においても長期的に社会に奉仕しようとしていた強い意志が窺える。

## 【三井家同族会】

多角化した三井家の事業を統轄し、三井家の共有財産を所有・管理する機関として明治26年(1893)11月1日に発足した。同日、附属する事務機関として三井元方も設立された。明治33年(1900)7月1日に三井家の家則である三井家憲の施行に伴い三井元方は三井家同族会事務局と改称された。

三井家同族会では昭和61年(1986)5月から代表者の呼称を議長から代表に変更した。

## 三井慈善病院開院式

明治42年(1909)3月21日の開院式に出席したイスラム系ロシア人のアブデュルレシト・イブラヒムの著作『ジャポニヤ』の中で、開院式の模様が「ミジュコシ男爵の病院」の章で紹介されている。同書では、「この男爵とは、当時三井合名社長、三井家同族会議長であった三井八郎右衛門のことであろう。彼が神田に建設した三井慈善病院は明治42年(1909)3月20日に落成した」と注釈されている。正確には三井八郎右衛門は、当時三井家同族会議長ではあったが、三井合名社長に就任したのは落成式をあげた明治42年(1909)11月であり、開院式当日は「三井元方総長」の肩書きであった。『ジャポニヤ』によると、三井八郎右衛門は開院式で次の通り挨拶を行っている。

「病院の運営は今後6名の東京帝国大学医科大学教授にお任せすることになります。この先生方は専門を考慮しながら互選されるものとします。病院に収容される患者の定員は125床とし、これ以外に日に200人の患者を無料で診察し、治療も行います」

また、三井慈善病院の開院に際して、『東京日々新聞』は明治42年(1909)3月19日付の紙面で「貧者の病を治療する病院 三井慈善病院の開院」との見出しで記事を掲載。翌3月20日付の『読売新聞』は「三井の慈善病院」の見出しで3面のトップ記事として掲載している。

## 設立時の財団法人三井慈善病院概要

所在地 東京市神田区和泉町一番地及三番地

総面積 3,453坪6合2勺(所有地2,953坪6合2勺、借地500坪)

建 物 総坪数 2,716坪4勺3才

本館 1,017坪5合8勺

第一、第二病室 434坪1合2勺

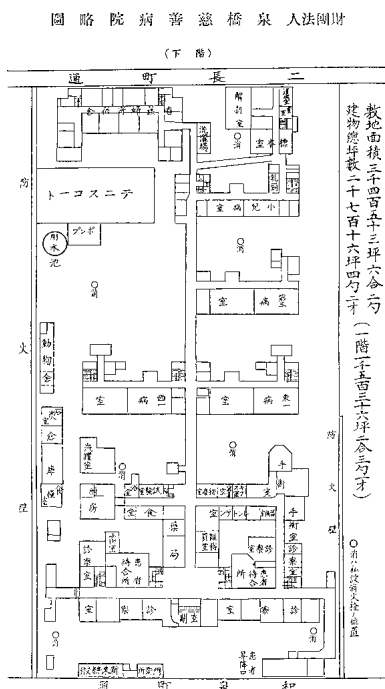
第三病室 94坪5合6勺4才

小児、産婦人病室 181坪1合1勺

看護婦寄宿舍 493坪8勺9才

研究室並標本室 232坪9合2勺4才

附属家 262坪6合5勺6才



泉橋慈善病院略図

※三井慈善病院は大正8年4月に泉橋慈善病院に改称

設立者 三井家同族 男爵 三井 八郎右衛門(高棟)  
 三井 元之助  
 三井 源右衛門(高堅)  
 男爵 三井 高保  
 男爵 三井 八郎次郎  
 三井 三郎助  
 三井 高達  
 三井 守之助  
 三井 武之助  
 三井 養之助  
 三井 得右衛門  
 総代 男爵 三井 八郎右衛門(高棟)

設立委員 委員長 三井家同族会事務局管理部副部長 益田 孝  
 委員 東京帝国大学医科大学教授 医学博士 土肥 慶蔵  
 同 同 岡田 和一郎  
 同 同 入澤 達吉  
 三井家同族会事務局管理部理事 朝吹 英二

役員 評議員会長 東京帝国大学医科大学教授 医学博士 青山 胤通  
 評議員 同 同 佐藤 三吉  
 同 同 土肥 慶蔵  
 同 同 岡田 和一郎  
 同 同 入澤 達吉  
 男爵 三井八郎右衛門  
 三井 八郎次郎  
 三井 三郎助



理事

監事

三井 高保  
三井 高生  
益田 孝  
朝吹 英二  
益田 孝  
朝吹 英二  
田中 文蔵  
成瀬 隆蔵  
有賀 長文

職員	院長兼外科医長	東京帝国大学医科大学教授	医学博士	田代 義徳
	内科医長	東京帝国大学医科大学講師	同	木村 徳衛
	眼科医長	東京帝国大学医科大学助教授	医学士	中泉 行徳
	耳鼻咽喉科医長	東京帝国大学医科大学講師	同	吉井丑三郎
	皮膚病科医長	東京帝国大学医科大学副手	同	伊藤 徹太

### 高度な医療レベルが一世を風靡

開院以来、貧困者への施療を目的として費用を徴収しなかったことに加え、東京帝国大学医科大学の高度な医療が受けられることもあり、早朝から受診希望者が殺到した。この中には貧困者を装った受診希望者も多く見られた。なお、三井関係者の受診は禁じられていた。

当時の医療レベルの高さは、東京



連日受診希望者が殺到

帝国大学教授で元本院外科部長の原勇三博士が田代義徳院長の追悼談に次の通り記している。

「……世上多数の救療機関があるが、本院の如く完全なる診療を施す所は少ないと思う。単に取扱患者数と施療日数と多きを誇りとする、いわゆる救療機



病室の風景

関の多き現代において、真に患者の立場より考慮せられて、加療の徹底を期するため尽くされた先生的人格にはただ頭が下がるばかりであり、幾百万の患者は先生の余徳に浴して健康を恢復し邦家のため働いておることと思う……」(昭和40年(1965)7月29日付『三友新聞』「三井厚生病院の今昔(上)三井厚生病院専務理事 <sup>はすみ しん</sup> 荷見晋」に掲載)

新来患者の受付は、患者数の多い内科、外科、皮膚病科が毎日、耳鼻咽喉科、眼科は隔日としていた。患者数の多かった内科、外科、耳鼻咽喉科は20名を定員として午前6時から8時まで受け付けた。開院した明治42年(1909)3月から12月の10カ月間の外来患者実数は1万208人に及んだ。同年6月までの患者の居住地は東京市15区全域をはじめ郡部、地方にも及んでいるが、浅草区(873名)、本所区(570名)、下谷区(539名)、神田区(495名)、深川区(443名)の順となっており、神田区和泉町での病院建設が最も適していたことを示している。

診療科目では明治44年(1911)4月24日産婦人科、5月1日小児科、大正3年(1914)放射線科、大正4年(1915)マッサージ科、大正8年(1919)病理科を設置している。これら拡張に伴い外来患者数の実数はさらに増加を辿り、開院した明治42年(1909)3月から昭和14年(1939)2月末までに総計111万4,101人に及んだ。

## 社会福祉の一大事業に脚光

三井慈善病院の開院を前に、中央慈善協会(現全国社会福祉協議会)が明治41年

時 報

◎財團法人三井慈善病院

三井一家が一百萬圓の巨資を投じて、市内神田區和泉町に新設された三井慈善病院は、起工後一ヶ月にして落成し、去る三月二十二日より開院したり。開院の敷地は無慮三千坪、建物は階下千二百坪、階上八百坪にして、設備は總て大學醫院を模範とし、更に最近の新式建築法を採用したることなれば、此種の建築としては蓋し完全のものなるべし建築施設に要したる資金は約三十萬圓に達せしが、残餘の七十萬圓を基本金とし、其利子を以て經常費に充つるものなりと云ふ。職員は評議員、理事の外、院長兼外科主任田代博士、内科部長、木村博士、助手醫學士二十四名、其他看護婦名、見習看護婦若干名を有す。同院の入院患者は百二十名、外来患者は約四百名の定員なるも、開院當初より施療を乞ふもの夥しく、入院患者は都合に依り未だ全部を收容するの運びに至らざるも、外来患者は

一日平均實に五百名に達すと云ふ。尙最中は二三の規定に基ける無資格者のみに施療することせしが、實驗の結果、必らずしも其規定に準ずる能はざるを以て、同院にて貧民と認めたるものは、總て施療を興ふるとなせりと貧者の幸福知るべきなり。三井一家の此舉や、一方貧民に對する好模範事業なるを以て、社會救済貧富緩和の見地よりするも眞に一大美舉と稱せざるを得ず。

◎東京市養育院安房分院

東京市養育院に於ては、收容兒童中、肺結核に罹りて病没するもの逐年増加の結果に鑑み之が救済の方法として、房州船形町に兒童保護所を設置し、之を安房分院と稱し、五月十七日之が落成式を舉行せり。同院の總建築費は二萬六千圓を要し、建坪三百四十七坪にして、校舍、食堂、浴室、病室等の設備充分に整ふのみならず、庭内には八畝餘の畑地を有して、院兒の練習に供するなど、設備大に見るべきものあり。定員は百三十五名なるも、目下五六十名を收容しつつあり。

—(114)—



「慈善」創刊号の表紙(復刻版)

「慈善」に掲載された  
三井慈善病院の紹介ページ

(1908)10月7日に設立された。中央慈善協會は明治政府が推し進めた「富国強兵」「殖産事業」により、都市部には工場労働者が増大、農村では人口の流出が続く、これに伴い貧困層や少年犯罪が増加したことへの対策として、貧民の救済や貧困の防止を目指した全国的な連絡組織として設立された。同協会では設立の翌年である明治42年(1909)7月に機関誌『慈善』を創刊しており、これは雑誌『月刊福祉』のはじまりにあたる。この『慈善』の創刊号では、三井慈善病院を紹介している。三井家の寄付による設立の経緯や開院後、外来患者が1日平均500名を超えていることなどにふれた後、「三井一家の此舉や、一方貧民に對する好模範事業なるを以て、社會救済貧富緩和の見地よりするも眞に一大美舉と稱せざるを得ず」と結んでいる。

## 三井高棟一行の欧米視察

三井慈善病院の設立者であり、評議員にも名を連ねていた三井八郎右衛門<sup>たかみね</sup>は、開院の翌年である明治43年(1910)4月から11月にかけての欧米視察旅行で慈善事業の調査を行うなど、病院の運営に深い関心があったことを示している。視察旅行期間中にはドイツ、オーストリア、スイス、イタリア、フランス、イギリス、アメリカで保険制度や貧民救済制度、慈善病院等を視察し、同行した医師にこれらの状況の調査を命じている。こうした成果をその後の病院運営の参考にしたものと思われる。

## 社団法人同愛社と協定

明治42年(1909)4月26日、三井慈善病院は社団法人同愛社と協定を結んだ。その中で、①同愛社の入院治療を要する患者について、三井慈善病院が同愛社からの依頼によって特に便宜を図り、この患者を入院させること、②三井慈善病院の外来患者で、遠路または病状によっては住居が同愛社に近い場合、三井慈善病院からの依頼によって特に便宜を図ること、が取り決められた。

## 2. 医療レベルの高度化と附属機関の充実

### 医師補習教育の実施

三井慈善病院では、明治43年(1910)から研究生及び講習生制度を開始し、参加者は1万人に及んだ。医務は東京帝国大学医科大学教授に委託し、院長及び科長は東京帝国大学医科大学の職員に嘱託し、多数の医員がその指導、監督のもとで救療事業に従事していた。このため三井慈善病院の診療は罹患病民の救療の一方で、医師教育を担っていた。創立から昭和14年頃までに勤務した職員は821名で、この他、見学生として在院した医師も3,014名に及んだ。また、時々開催した医学講習会に参加した医師の数は1,862名

に上り、これらの医師の中には外国からの参加者も多く、特に中国からの研修生が239名、講習生が98人と多かった。

さらに、三井家では科長などの職員を海外に派遣して、救療事業およびその専門とする学術を視察、研究させている。まず、明治45年(1912)には看護婦長・錦谷礼利をドイツのケルンで開催された第3回看護婦国際大会に出席させた。さらに大正9年(1920)から昭和11年(1936)までの間には11名が海外視察を行っており、他の方面から海外出張を命じられた職員に対しても特に費用を負担し、救療事業の視察を行わせている。第2代事務長の船尾栄太郎は大正9年(1920)3月5日から10月8日までの海外視察について、「欧米施療事業 特に病院に就て」(大正9年(1920)10月19日 泉橋慈善病院役員会に於ける報告演説筆記/三井文庫所蔵)の中で、アメリカ、イギリス、フランスの3カ国の11の病院について、組織から仕事ぶりまでを詳細に報告している。

#### 附属産婆看護婦養成所

三井慈善病院附属産婆看護婦養成所では、病院による診療の一方で産婆看護婦の養成を行っていた。大正5年(1916)5月には警視総監から看護婦養成所に指定され、大正10年(1921)2月には東京府知事から私立学校令による産婆看護婦養成所設立の認可を受け、さらに同年4月内務大臣から私立学校産婆講習所指定規則による指定を受けている。この間、三井慈善病院は大正8年(1919)4月に泉橋慈善病院に改称し、これに伴い附属産婆看護婦養成所は附属看護学校となった。附属看護学校には産婆講習科と看護法講習科があり、昭和14年頃までに産婆の資格は297名、看護婦の資格は515名が取得している。昭和20年(1945)3月10日の東京大空襲により病院は全焼し、閉鎖したが、後の昭和32年(1957)にナイチンゲール賞を受賞し叙勲を受けた三上千代、聖バルナバ医院の初代医師となった服部ケサをはじめ、養成者は1,000人に達した。

三上千代は、ハンセン病患者を救うため、明治45年(1912)に附属看護学校に入所している。同時期に服部ケサがレントゲン科および小児科の研究のため三井慈善病院に看護婦として勤務しており、そこで2人は多くのハンセン病患者と出会った。三上千代は看護婦養成所を経て、ハンセン病患者救済のためイギリス人のコンウォール・リー女史



泉橋慈善病院附属看護学校の生徒(昭和12年)

が草津に開設した聖バルナバ医院の最初の看護婦として赴任している。そして、三上千代は、リー女史に医術開業試験に合格していた服部ケサを医師として同医院に推薦し、ともに生涯をハンセン病患者のために尽した。蘭学医たちが開設し、天然痘から多くの人命を救ったお玉ヶ池種痘所の精神は、東京帝国大学医学部へ、さらに三井慈善病院へと受け継がれ、三上千代、服部ケサといった人材の輩出につながった。

#### 泉橋慈善病院賛助婦人会

大正8年(1919)、慈善病院設立の趣旨を翼賛し、その事業を幫助する目的で、これに賛成する婦人を会員とする「泉橋慈善病院賛助婦人会」の設立が計画され、翌大正9年(1920)4月7日に発会式が開催された。事務所は院内に置かれ、会員は約100名に達し、その拠出金によって入院患者救療費の寄付並びに入院患者に日用品を提供した。

賛助婦人会の会長は井上馨夫人・末子、副会長には澁沢榮一夫人・榮子、三井八郎右衛門(高棟)夫人・苞子が就任した。昭和9年(1934)には、三井八郎右衛門(高公)の家督相続を受けて、苞子が副会長を辞任、三井八郎右衛門(高公)夫人・銀子が副会長に就任し

た。さらに同年、井上末子会長と澁沢榮子副会長が死去。会長不在の後、昭和12年(1937)に副会長の銀子が会長となった。

賛助婦人会は具体的な活動目標について、①入院患者の慰問などを少なくとも年間1,000件以上行う、②昭和2年(1927)以後に入院した妊婦の産後退院者を収容し、若干の日時を静養させるため褥婦室を設ける、③病院勤務員、特に看護婦の慰安奨励のための施設なども講じる、としている。また、規約では総会を4月に開催し、2、9、11月に常会を開き、①病院当事者から病院の現況を聴取し、入院患者を慰問する、②講師を聘して慈善救済に関する講話を聞く、③当会の目的を遂行するために必要な方法について協議する、としている。

運営費は「会員は5カ年を1期とし会費として当該期間毎年壺口金拾貳円を醸出することを得」(規約第十条)とした。また、「男子にして本会の趣旨を賛成する者は之を賛成員と称す。其会費は第十条の規定による」としていた。

賛助婦人会の収入と支出を見ると、大正9年(1920)の収入4,792円、支出1,591円に対して、昭和13年(1938)には収入5,992円、支出4,179円となっており、支出が3倍近く増加している。この支出の増加は、賛助婦人会の積極的活動に伴うものといえる。即ち、取扱件数が当初の1,000件から4,000件にまで増加したほか、患者慰問、患者家族訪問件数もともに1,000件を超えるまでに増加したのである。なお、賛助婦人会には、毎年4,000円から7,000円の寄付基金が寄せられていた。

同会の活動内容が、『泉橋慈善病院賛助婦人会報告——大正12年12月』(謄写版刷、三井文庫所蔵)に残されている。

この内容の一部を下記に紹介する。

「病人相談所にては、その後主として罹災入院患者の身上調査なしおりたるが、そのうち向島第七中学校内第五師団臨時病院より移したる火傷患者中、孤児らしき二人の少女のことに關し、約二百五十円を支出し、『都』『日々』『朝日』『時事』『報知』の五新聞に広告をなし、また報知新聞に新聞記事の掲載方を依頼し、警視庁および市役所に交渉するなど、種々尽力をなしたる結果、一児の両親を見出し、全快のうえこれを交付したるも、他の一児は未だ引取人なし。

尤も、この子を貰いたしとて申込みに来たれる者多しといえども、なるべく両親を見つけ、これに手渡したく、今なお種々苦心中なり。

このほか入院の老衰者にして引取人なきもののため、一々養老院に交渉し、全治退院の暁、ここに収容されるよう尽力せり。本日まで取扱いし人数男女四人なり」

※現代仮名使いに直す

## 病人相談所の開設

「泉橋慈善病院賛助婦人会」の活動として、もう一つ大きな柱となったのが「病人相談所」の設置だった。外来患者の“煩悶”を解決するとともに、病気が回復したあとの就職口の紹介・斡旋、その他趣旨書によると「診療打切り後困る人」「入院が許可されても保証人がないので困る人」「子供に牛乳を飲ませると医員からいいつけられて困る人」「退院が許されても帰るべき家がなくて困る人」「友人または親類に手紙が出したくても出せなくて困る人」「診察がすんで家に戻る時病気が重くて歩いてかえるのに困る人」「眼鏡、杖其の他の小器械の使用を医員からいいつけられて困る人」「お産をしても子供に着せる着物が無いので困る人」「産婦が亡くなってあとに残った子供の仕末に困る人」といった相談に応じるとしている。さらに病人相談所から、「入院患者ならびにその家族の慰問」と「入院患者の家庭訪問」なども積極的に行い、患者の家族の生活や健康について詳細に調べた上で注意や世話も行っている。

## 三井家の寄付

三井家は三井慈善病院設立後、諸外国の慈善病院の状況を調査し、明治44年(1911)20万円、明治45年(1912)5万円を寄付。大正8年(1919)には創立10周年と同年4月7日に皇后陛下の行啓を仰いだことを記念して175万円、大正14年(1925)100万円を寄付。その後も150万円の寄付を行い、昭和15年(1940)まで合計5回にわたって450万円を寄付し、施設の充実を図っている。設立の際の100万円と合わせると、550万円の寄付が行われ、これが三井慈善病院の元資金となった。このほか、救急営繕改修費等として、明治43年(1910)に水害傷病者救護費が三井家及び三井各社重役16名から寄付が行われ、その後



も昭和4年(1929)までの間に三井家から7回にわたって合計約30万円の寄付が行われている。

さらに昭和8年(1933)以降、高騰する諸物価と基金収益率の低下により、年々支出超過を辿ったため、三井家では昭和14年頃までに38万円の補助を行っている。

このほか、大正5年(1916)の御大典記念として宮内省から御下賜金があり、これを元として慈恵資金が創設された。以後、年々宮内省からの御下賜金、内務省からの奨励金及びその他の篤志寄付金を加え、これら慈恵資金の総額は昭和14年頃までに4万7,000円となっている。これにより昭和20年(1945)までは診療を全て無料とし、入院及び外来の費用はいっさい徴収されなかったが、第2次世界大戦後の財閥解体によってこれらの資源は解消した。戦後の病院経営は、昭和21年(1946)から施行された社会保険診療制(『東京大学医学部百年史』記述による)によって行われた。

## 第2章 大正時代～昭和時代

### 1. 苦難の大正時代

三井慈善病院から泉橋慈善病院へ

大正8年(1919)4月、皇后陛下の行啓を仰いだことを記念して三井家が175万円を追加寄付し、維持基本金(基金)を300万円として病院の規模が拡張された。さらに組織を改正し、病院名を三井慈善病院から泉橋慈善病院に改称するとともに、多くの優良企業を育成した経営手腕を要する澁沢榮一を評議員に招いた。

『躋民寿域絵巻』

三井記念病院には『躋民寿域さいみんじゅいきえまき絵巻』と銘打った8枚に及ぶ絵巻が保存されている。三井家の倉庫に保存されていたものが平成2年(1990)頃に見つかり、三井記念病院に寄贈された。「大正六年七月」という日付と吉岡徹という画伯の筆になることが明記されている。

絵巻は、まず趣意として「明治参拾九年四月三井家総代男爵三井八郎右衛門氏汎ク貧困なる病者ノ為施療ヲナス目的を以テ金壱百萬円ヲ寄付シ民法ノ規定ニヨリ財団法人設立ノ挙アリ」云々との説明があり、当時の困窮者の生活の様子を8枚の絵で描いている。

各絵の題名と解説は次の通り。

#### ◇第一図「貧ト病」

東京市二百万ノ人口中一戸ノ豊数五疊以下ノ家ニ住スル者二十万乃至三十万ト称ス、一家五口トシテ一人一疊ノ割合ナリ、此ノ一家ノ家計亦月二、三十円ヲ要スト、故ニ二、三十円以下ノ月収ニシテ家ニ病者ヲ出ス者ハ到底療養ノ途無キコ

ト皆然リ

◇第二図「緩急相扶」

下層ノ者ハ互ニ相頼リ相扶クルコト上、中層ノ人々ヨリモ遥ニ厚キモノアリ即チ重症者アレバ隣人自ラ業ヲ休ミ荷車等ヲ賃シ病者ヲ施療病院ニ送ルモノ多シ



◇第三図「救ヒノ門」

三井慈善病院門前ノ掲示ニ曰ク「本院デ診察シテ上ゲマスノハ医師ノ診察ヲ受ケ薬ヲ買フ資力ノ無ク本當ノ困窮者ダケニ限ルノデス



○夫レデスカラ受附デ無資力者デ無イト認メマスレバ御断ワリヨシマス ○併シ急病人ヤ怪我人ニハ何方ニ限ラズ何時デモ御越ニナレバ応急ノ手当ヲシテ上ゲマス 勿論費用等ハ一切要リマセン

第一図「貧ト病」

◇第四図「外来ノ群集」

大正六年六月中外来患者一日平均  
新来 五十二人  
再来 四百四十六人  
合計 四百九十八人



第二図「緩急相扶」

◇第五図「恵ノ手」

医師 五十人  
薬剤師 六人  
事務員 五人

看護婦及ビ同講習生 百〇一人  
 合計 百六十二人

◇第六図「運搬車」

外来患者ノ多クハ入院ヲ希望スレドモ其ノ入院ハ一ニ医員ノ決定ニ俟ツ 現今  
 患者百人中僅ニ七人ノミ入院ヲ許サルル割合ナリ



第三図「救ヒノ門」



第四図「外来ノ群集」



第五図「恵ノ手」



第六図「運搬車」



第七図「病室」



第八図「積善ノ家ニハ余慶アリ」

◇第七図「病室」

現在病床数 百三十一

一ニ看病ニ二葉ノ古諺今モ尚真理ナリ 本院ハ施療ノ外看護婦ノ養成ヲナス  
開院以来業ヲ卒ヘ免許ヲ下附セラレタルモノ既ニ百十二人ニ上ル

◇第八図「積善ノ家ニハ余慶アリ」

開院以来即チ 自明治四十二年三月 至大正六年六月末日 八年三ヶ月ノ間ニ  
取扱シタル病者ノ数

新来患者 十五万千三百十三人 内入院施療一万三十九人

関東大震災を乗り越える

大正12年(1923)9月1日、関東地方をマグニチュード7.9という大地震が襲った。死者・行方不明者約14万人、焼失家屋約44万7,000戸に及ぶ未曾有の災害となった関東大震災である。震災時、当時の泉橋慈善病院が作製したガリ版刷の『震災後ノ業務報告』(三井文庫所蔵)では大正12年(1923)9月1日から同年10月30日までの状況を下記の通り伝えている。



泉橋慈善病院

「職員以下その(患者)慰撫鎮静に務めおる折柄、裏手ミツワ化学試験所火を失し、折柄の南風にてたちまち同所は一面火となりしが、幸い付近の消防署よりポンプ数台来たり、二時鎮火したり。しかるに間もなく東隣の東京衛生試験所また出火したり。このとき消防署のポンプは、すでに丸ノ内の方面に去りて在らず。先刻より水道消火栓にホースを挿し入れ用意ありし本院消防隊は、ただちに水道の圧力不足なるを発見し、かねて備付けあるギャソリン・ポンプを操り、構内貯水タンクの水を利用し、いまだ大事に至らざるうち、たちまちこ

れを消し止むるをえたり。

木村院長、田代理事、船尾理事いずれも前刻よりその出先より本院に駆けつけ、付近の火の消防に成功したるを見て、一同安堵したり。

これより先、取り敢えず門前に天幕を張り、震災による傷者の応急手当を開始し、午後四時ごろまでに三十二人の手当てをなし、七人を入院せしめたり」

「日本橋および神田川向うより吹き寄せたる火の手は、南柳原河を焼き払い、和泉橋・美倉橋も危くなり、東は浅草橋通、西は御成通ともに火となり、火焰天に漲り遠近の爆音ますます甚しく、いよいよ危険の来迫を思い、まず患者を保護して安全の地に非難せしむる準備をなし、人を遣わして兼て本院非常時の避難所と定められある神田区練成小学校および下谷区徒士町小学校に交渉せしめ、そのあとより直ちに重症患者十五名を担架に載せ、看護婦取締・錦谷礼利以下、看護婦数名これを担い避難を開始したり。

やがて午後五時となり、風は変じて北西から東南に向かい吹き、火勢いよいよ猛烈となり、本院もついに延焼を免かざるべき状態にあるを認め人を上野寛永寺に馳せしめ、また前記両校に人を送りて、ただちに寛永寺に避難すべきを伝え、残存せる入院患者全部五十名を担架に載せ、なるべく陽のあるうちにと、歩行し得る者は徒歩せしめ医員関口、薬剤員野沢、事務員満沢、そのほか職員、看護婦付添い保護引率して、急ぎ上野公園に向かわしめ、なお職員および小使に風呂敷包、小車等にて重要書類、貴重品、器械等を搬出せしめ、この一行に随徒せしむ」

「一行約百五十名は非常なる雑踏裡を互いに相扶け助けて黒門町より上野公園に近づかんとせしも、群集のため入ること能わず。よって歩を転じて鶯谷方面に向かいしも、道路には車両、荷物、人馬いっばいに充満して少しも前進すること能わず、引き来たりし小車も、その載せおりし物品とともに道に捨て、岩倉鉄道学校(注・病院から約1.6km)構内に入り、暫時休息したるに、ここもまた次第に火焰の下となり、危険甚だしきをもって、ついに万難を排して公

園に入るの外なきこととなり、患者を扶助するに急なる余り、携帯しきたれる手荷物の大部分を構内に委棄して、鉄道線路を横切り、非常なる困難を冒し、極めて狭隘なる坂路をよじ、千辛万苦の後ようやく公園内に達することをえたり」

「この日(注・2日)午前十一時ごろ東隣衛生試験所の前、向柳原町は焼け、次第に北に燃えて中央劇場その他を舐め尽くし、前日の焼跡『ミツワ』化学試験所を回りて間もなく、病院裏手の向こう側、二長町一体を焼き払いたり。このとき残留諸員中一隊は、かねて命じおきし如く小車一両に必要な書類その他を積み焼跡の焦土を踏みて、これを本郷区内の安全地域に移出し次の一隊は病院内外の警固に任じ、他の一隊は専ら消防に当たり、寄宿舍の屋根に上がり『タンク』の水と『ギャソリン』の尽くるまでホースの手を緩めず消防したのだが、時あたかも風は北に向かって吹き、猛火の威力もやや衰え、ついに和泉町に延焼することなく、火は北に向かって趨り、病院およびその付近一廓は幸いにして天佑に因り全きをえたり」 ※現代仮名使いに直す、句読点を付す

## 風水害で特別診療

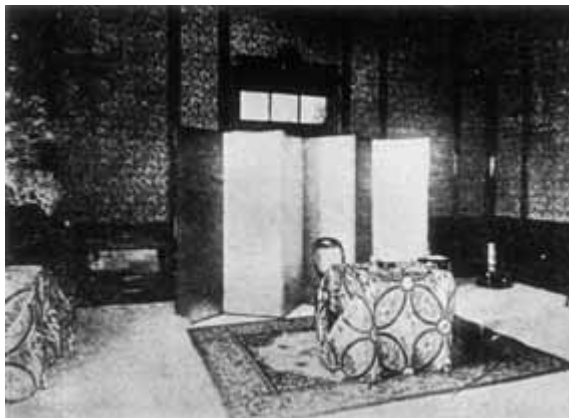
このほか、明治43年(1910)8月に発生した東京市内の水害に際して、罹災者のうち臨時救護した傷病者は、延3,981名(内入院患者237名)に達した。この臨時救護に要した費用8,155円は、三井家と三井各社の重役からの寄付金による。また大正6年(1917)の暴風雨に際しては、延1,286名(内入院患者78名)に特別診療を行った。

## 2. 皇族の患者慰問

### 皇后陛下が初の行啓

三井慈善病院は創立以来、広く社会に注目され、皇后陛下や皇族が数多く訪れてい

る。明治44年(1911)2月9日には宮殿下が訪れ、院内の各室を視察されたのをはじめ、大正6年(1917)1月3日には皇后陛下(後の貞明皇后)から患者一同に対して本綿、同裏地各104反と裁縫料75円のお下賜があった。さらに大正8年(1919)4月7日には当時の泉橋慈善病院の業務奨励のため皇后陛下の行啓があった。午前10時に到着されると、三井家同族、泉橋慈善病院評議員、理事、監事、各医長、主任が正門内の右側に整列し、職員、看護婦一同は和泉町通り南側に整列して歓迎した。皇后陛下のご到着後、泉橋慈善病院を代表して評議員会長の佐藤三吉(医学博士)が玄関先にお出迎え申し上げ、佐藤評議員会長の先導によって2階の便殿に



皇后陛下行啓の際の御座所



皇后陛下行啓の際の御馬車

入られた。御小憩の後、皇后陛下は佐藤評議員会長および全評議員、田代義徳院長、井上馨公爵夫妻等への拝謁を仰せ付けられた。この間、入院患者一同に御菓子料として金一封を賜わった。続いて田代院長の先導によって病室をはじめ、順次院内を御巡覧された後、再度便殿に入られ、佐藤評議員会長、田代院長に御奨励のお言葉をかけられた。また、三井家総代である三井八郎右衛門たかみね(高棟)に特別に拝謁が許された。御還啓の前には再び高棟に御菓子を賜った。

この日、下賜された金品は、泉橋慈善病院に御紋章入銀製花盛器、佐藤評議員会長と田代院長に白羽二重、三井家同族と佐藤評議員会長、評議員、理事、監事、田代院長に御菓子折、院歌を合唱した看護婦一同と作曲者の北村季晴氏に御菓子、入院患者108人に



御菓子料(金一封)であった。

泉橋慈善病院々歌

沼波武夫 作歌 / 北村季晴 作曲

(合 唱)	一、仁を説かざる聖無く	愛を説かざる教無し
	我が身のあるは人々に	我が眞心を尽す為
(甲部唱)	二、物に乏しき際にして	病める人こそあはれなれ
	葉を得べきすべも無く	窓洩る風を侘びて臥す
(乙部唱)	三、斯る同胞救はずて	進む医術を何かせむ
	弱きを助けいたはらで	豈に文明を称へ得む
(甲部唱)	四、三井の水の潔く	澤の黄金を擲ちて
	救ひの場を開きける	その眞心の尊さよ
(乙部唱)	五、此院に努めて人の道	遂ぐる我等の光榮や
	慈善の籌絶えざらば	世に悲しみの暗あらし
(合 唱)	六、仁を説かざる聖無く	愛を説かざる教なし
	我が身の在るは人々に	我が眞心を尽す為



皇后陛下行啓記念(大正8年)陛下賜銀製花盛器

## 関東大震災に際しての行啓、台臨

大正12年(1923)9月1日の関東大震災の後、9月19日午後2時に竹田宮妃殿下が皇族を代表して来院の上、罹災傷病者を慰問され、患者に御菓子を賜った。

同年9月29日午後1時には皇后陛下が来院の上、各病室を巡覧されて災傷病者を慰問された。皇后陛下は幼児、老人、妊婦等の患者を労わり怪我の様子や火傷の状態について一人ひとりにお尋ねになり、そのお慰めのお言葉に患者一同は感激した。同日、各宮妃殿下から患者一同に衣類を賜った。同年12月22日には皇后陛下より患者に対して冬に備えるとともに新年に際して着用するため、木綿衣を賜った。御下賜品は、本裁(男物48枚、女物49枚)、四ッ身(男物8枚、女物9枚)、一ッ身(19枚)。

さらに、昭和5年(1930)1月13日には高松宮殿下が来院され、院内各室を巡覧の後、御菓子料として金一封を御下賜された。同年6月5日には東久邇宮殿下が来院され、院内各室を巡覧された。

## 国務大臣及び宮内官の視察

明治43年(1910)7月22日に小松原文部大臣、同年11月5日に平田内務大臣、大正6年(1917)1月19日に大森皇后宮大夫、昭和3年(1928)9月24日に望月内務大臣、昭和5年(1930)3月12日に安達内務大臣が来院するなど、当初から国務大臣及び宮内官が視察に訪れている。

## 3. 激動の昭和期

### 創立30周年記念式挙行

昭和14年(1939)4月7日、泉橋慈善病院の創立30周年記念式が挙行された。この当日の様様を『泉橋慈善病院報告——自昭和14年1月1日、至12月31日』(三井文庫所蔵)で

下記の通り紹介している。

当日は「君が代」の斉唱に始まり、院務報告、挨拶、祝辞と続き、「泉橋慈善病院々歌」で締め括られた。祝典出席者の挨拶内容は次の通りである。

#### 佐藤三吉・評議員会長

「本院は病者の診療に支障を生ぜざる限り、医家の補修および研鑽の資料に供している次第であります。しこうして現在までに、4,876人の医師が来られたことになっております。すなわち本院は救療事業を基本といたしまして、医育事業にも貢献いたしているのであります。

当機関がこの如き顕著なる成績を挙げ、もって社会民生に貢献しえたることについては、まずもって創立者たる三井家の功德を記念いたさねばならぬことは申すまでもありませんが、これと同時に東京帝国大学医学部の多大のご後援と本院職員、看護婦等の忠勤および宮内省、厚生省、東京府のご奨励に對し厚き感謝を記念すべきことと思ひます」

#### 三井八郎右衛門<sup>たかきみ</sup>(高公)・三井家総代

「年を閲すること、ここに満30年、その間、時運の推移と世態の変遷とによる複雑せる社会に對應し、施業救療に従事し、いささか社会の福祉増進に貢献しえたるは欣幸とするところなり」

※現代仮名使いに直す

#### 泉橋慈善病院から三井厚生病院へ

その後、泉橋慈善病院では、再度三井家の社会事業であることをアピールする目的で昭和18年(1943)に三井厚生病院と改称し、昭和27年(1952)の社会福祉法人令施行に伴い社会福祉法人三井厚生病院へと改組している。

#### 東京大空襲

昭和20年(1945)3月10日の東京大空襲によって三井厚生病院は開院以来の建物を消失した。当時の模様は昭和30年(1955)3月15日付の『三友新聞』紙面に紹介されている。その中で、大空襲当時、看護婦であった原田みさを、金子茂子、門多正の3名が当時を振

り返っている。

「大空襲は九日の夜行われ、同病院は三方火に囲まれ、一方が僅かに逃げ出せるだけになった。同病院の前にある凸版印刷の工場からは、南方占領地で使用する一万円、五千円の軍票紙幣が燃えながら雨のように降ってきた。宿直の医者はいよいよ患者の脱出を命令した。すでに十日の午前一時すぎ頃になっていた。

六十人からいた患者を担架に乗せ、火の子の降るなかを一人ずつ竹町の焼けあとに運んだ。金子さんの運んだ患者は焼けあとでふとんや着物を盗まれたりした。全部患者を運び出してから病院は焼けていった。すぐに朝になった。一睡もしない看護婦たちは、こんどは患者を東大の病院に収容するため、焼け野原を通り、半里以上もある道を湯島の坂を抜けて運んだ」

## 第3章 戦後復興への道

### 1. 焼け跡からの出発

#### 荷見理事に託された病院再建

壮大な洋風建築で人々の目を見張らせた三井厚生病院も昭和20年(1945)3月10日の東京大空襲で建物が全焼した。このため、軽症患者は帰宅させ、重症患者は他病院や東京・芝にある三井伊皿子家の屋敷や本郷片山町の栗山重信院長邸、白石謙作内科部長邸へ収容するなどして対応した。外来の診療活動は、日本橋室町の浅沼商会のビルを借り受けて、仮診療所を開設。空襲が激しくなる中、診療を続けた職員は医局員・事務員など全体で30名ほどだった。

このような状況の中、昭和20年(1945)8月15日、日本は終戦を迎えた。焼け跡の中から出発した三井厚生病院であったが、再建は苦難の連続であった。後ろ盾である三井財閥はGHQの指令により解体され、三井財閥および三井系各社の首脳陣は公職を追放されたため、病院の再建にまで手が及ばず、資金面で援助が得られない状態だった。

このとき、再建を託され、理事に就任したのが三井合名考査課で三井厚生病院と関係の深かった荷見晋はすみしん(後の評議員副会長)である。

病院理事で公職追放を受けた三井不動産の佐々木四郎社長は荷見理事に対し、「病院の善後策、再建は君以外にやれる人はいない。是非頼む」と要請した。佐々木社長もGHQとの折衝で必死の苦闘を続けており、病院の再建にまで手が回らないのが実情だった。

荷見理事は三井合名を経て、三井不動産、三井木材の役員を歴任し、当時、仲間たちと新会社を設立し、社長に就任したばかりだった。荷見理事は当時の心境をこう語る。

「病院再建は火中の栗を拾うようなものだと、親類や先輩・友人など誰一人として賛成する者はいない。しかし、私としては三井家に対する恩義、なお三井家先代の偉業たる病院であることを思い、さらに和泉町の焼け跡瓦礫の

山を見るに忍びず、敢然としてお引き受けするに決して、お答えしたのであった」(昭和40年(1965)8月5日付『三友新聞』「三井厚生病院の今昔(下)三井厚生病院専務理事 荷見晋」に掲載)

再建を引き受けた荷見理事は、まず新院長を決定した。ちょうど栗山院長は昭和21年(1946)3月、東京帝国大学の定年退任とともに院長職を辞しており、後任が決まっていなかった。病院には代々、東京帝国大学から院長が赴任していたが、病院再建は激務である。荷見理事は東京帝国大学・田宮猛雄医学部長など関係者と協議の上、病院古参の産婦人科部長・岩田正道博士を新院長に推薦した。岩田部長はこれを了解し、昭和22年(1947)6月、病院職員から初めて院長に就任した。

また、白石内科部長を院長代理(後の副院長、院長)とし、事務長に元三井合名の高木雄次郎を据えて人事体制を整えた。

### 建物と資金の調達に奔走

再建に必要なのはまず建物と資金である。病院建物でかろうじて躯体を残したのは大正15年(1926)に建てられた鉄筋コンクリート3階建ての看護婦寮宿舎と、昭和3年(1928)に建てられた同じく鉄筋コンクリート3階建ての病理棟のみであり、周囲は一面の焼け野原で、この2棟は昭和通りからはっ



焼け残った病理棟㊦と看護婦寮宿舎㊧

きり見えるほどだった。人事体制を整え、早速、この2棟で診療を再開しようとしたが、戦後復興事業を担う東京建築復興助成会社にすでに接收されており、手がつけられなかった。

このため、荷見理事ら病院職員は厚生省や都庁など関係省庁を東奔西走し、ようやく接收の解除に至った。その後、看護婦寮宿舎を本館、病理棟を2号館とし、三井建設(現

三井住友建設)に依頼してベニヤ板囲いで診療スペースを作り、本館1階・200坪を外来診療所、2階を各科共同で使用する事とした。また、2号館の約100坪にも外来と手術室を配し、2階に産婦人科、3階に看護婦寮を設けた。

さながら野戦病院の様相ではあったが、急場の診療体制は整った。しかし、病院の看板を出すには、20床以上なくては許可が下りなかったため、ベニヤ板で急遽病室を増設した。こうして昭和22年(1947)8月、神田和泉町に戦後初めて「三井厚生病院」の名前が掲げられた。なお、戦後の詳しい実情については、本編末の清瀬 闊<sup>ひろし</sup>元副院長の寄稿を参照されたい。

建物と平行して必要なのは資金である。資金は三井系各社から寄付賛助を受けるか、借り入れする必要があったが、財閥解体で分裂した各社に寄付は望めなかった。融資を受けるにも他産業と区別され、病院の評価は最低の「丙」であった。もはや、資金を得るには土地の一部を売却する以外に手段はないが、銀行の評価額は坪350円から400円という安価であったため(当時の大卒銀行員の初任給が約500円)、荷見理事は売却を思いとどまっていた。そこに、折り良く坪1,000円出してもよいという希望者が現れたため、荷見理事は病院の土地約1,000坪(現千代田区立和泉公園の一部)を100万円で売却し、再建資金に充てた。

その資金で昭和23年(1948)に74床、翌昭和24年(1949)に30床増床したが、まだ病院本来の機能を発揮するまでには至らなかった。

## 2. 財団法人から社会福祉法人へ

戦後初の新病棟が竣工

荷見<sup>はすみ</sup>理事は再度、三井首脳陣に寄付を呼びかけた。ちょうど三井グループでは三井の慈善組織「三井報恩会」への寄付を各社から集めており、病院への寄付も依頼したところ、三井銀行(現三井住友銀行)の好意によりモルタル造りの2階建て病棟(3号館)・50床を新築することができた。昭和26年(1951)3月に竣工し、ベッド数は合計148床とな



左から本館・2号館、食堂、3号館（新館側から撮影）

った。

当時は職員への給料の未払いで苦しむこともあったが、この病棟の新築で病院経営は一息ついた。病棟の落成式では「こんな立派な病院ができたことは実に嬉しい」と感涙にむせぶ医員の姿もあった。

また、この頃から中庭を整地し、テニスコートとして利用するようになった。やがてこのテニスコートを囲むように運動場ができ、白石副院長など多くの職員が軟式テニスを楽しんだ。隣接する千代田区立佐久間小学校（現千代田区立和泉小学校）から運動用具を借りて運動会も行われ、患者が窓から応援するなど焼け跡にも次第に活気が戻ってきた。

昭和26年（1951）4月には医師インターン認定病院となり、年2名の受け入れを開始した。ちなみに直木賞作家で医学博士の渡辺淳一もこの頃、インターンとして在籍しており、小説内でもしばしば三井厚生病院が登場している。

そして昭和27年（1952）5月、社会福祉法人令施行に伴い、三井記念病院は「財団法人」から営利を目的とせず、公共性の高い民間法人「社会福祉法人」へと組織を変更した。

昭和28年（1953）5月1日付の『三友新聞』では、「焼け跡の再建も一応なり、設備も整って来患は月3,000人を越えるようになった」と病院の様子を写真入りで掲載している。

さらに昭和29年（1954）、3号館の北側に隣接して食堂・浴室・寄宿舍などの2階建て新棟が増築され、それに伴い正面入り口に渡り廊下を設け、各棟へ移動しやすくした。



昭和30年(1955)4月、岩田院長の退任に伴い白石副院長が院長に就任した。増加する患者の収容に対応するため、三井グループ各社の支援により翌昭和31年(1956)4月から新たにブロック造りの2階建て病棟(新館)・58床の建設を開始した。同年11月5日に竣工式を迎え、三井家当主で評議員会長・三井八郎右衛門(高公)<sup>たかきみ</sup>をはじめ三井グループ各社首脳陣や、医学関係からは東京大学医学部長・内村



三井厚生病院の再建ぶりを伝える昭和28年5月1日付の三友新聞記事

祐之博士、東京第一病院(現国立国際医療センター)院長・坂口康蔵博士など約150名が出席して盛大に行われた。これまでの病棟には暖房設備がなく、冬は火鉢であったが、新病棟には暖房が設置された。また、賛助会社の施設利用を考慮し、58床のうち約半数を三井銀行(現三井住友銀行)・三井物産・東洋レーヨン(現東レ)・三井造船・三井金属鉱業など三井各社の委託ベッドとした。これで病院建物は本館・2号館・3号館・食堂・新館の計5棟、病床数は既存病棟と合わせ212床となった。

## 第4章 再び高度医療を

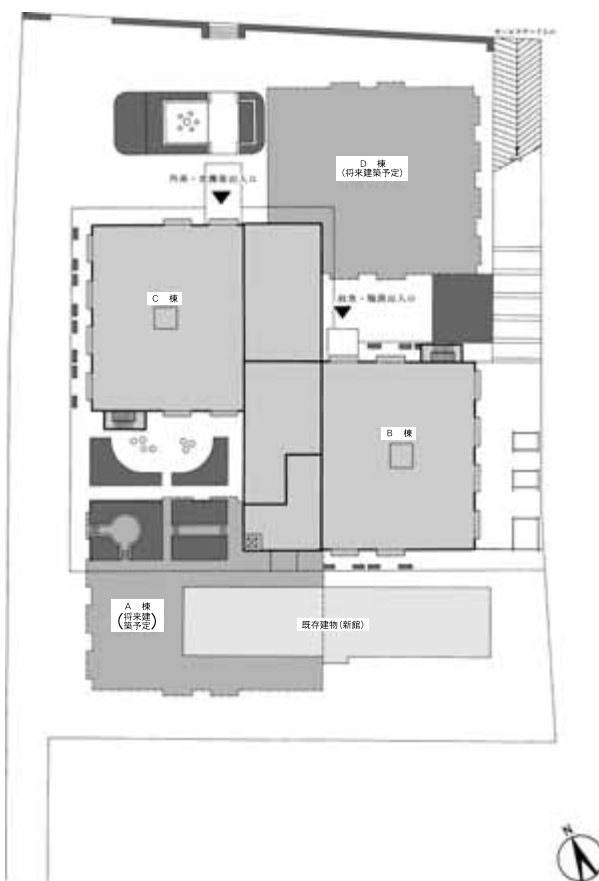
### 1. 最新の医療病棟建設へ

#### 第1期工事始まる

土地の売却や寄付金による新病棟建設等で息を吹き返した三井厚生病院であったが、それは戦後の復興という意味であり、高度経済成長を続ける日本国内にあっては、未だ病院の規模は完全なものではなかった。

三井厚生病院では白石謙作院長が昭和39年(1964)、膵臓がんのため死去した。

その後、院長不在のまま、東京大学医学部神経科・秋元波瑠夫教授、耳鼻咽喉科・藤田馨一部長の2人が続けて院長代理を務めたが、東京大学と関係の深い三井厚生病院では、同大学からの正式院長赴任を希望する声が高まっていた。戦後以来、職員を2代続けて院長としてきたこともあり、東京大学からの任命赴任のない状況を危惧した三井厚生病院部長会は同大学教授会に陳情した。当時の島蘭順雄医学部長が泉橋慈善病院元院長・島蘭順次郎の子息だったことも幸いし、昭和41年(1966)に東京大学医学部第二外科の木本誠二教授が新院長に就任した。この時、木本院長と三井グループ首脳陣との間には病



昭和43年当時の建替え工事計画

院再建計画が約されており、職員にも新病棟への建替えの機運が高まっていた。

昭和43年(1968)、三井グループ26社からなる「月曜会」(昭和25年(1950)発足。月曜日に例会を行っていることから命名)は資金22億円を各社で分担拠出し、近代的な総合病院への建替えを決定した。第1期工事として新館を残して各旧棟を取り壊し、6,600㎡の敷地に地下1階・地上13階の最新医療病棟2棟を建設し、これをBC棟と呼び、将来的にはA棟・D棟を新築し、4棟を接続する計画とした。

基本設計を担当した東京大学工学部教授の吉武泰水工学博士は設計コンセプトを次のように述べている。

「シティーホスピタルに適応したものとすること。規模としては当初400床位、将来の発展拡張は敷地の容積率から1万坪は建てられることもあって、約650床位を想定し、さらに見合う将来建築の配慮をしておくこと。工事中も既存の診療施設の運営は続けていくこと。設備は病院機能を果たす重要要素として特に重点を置くこと。というような基本的な条件を設定して検討した上で、病院の伝統的パビリオンタイプと新しい有機的ブロックタイプの利点を生かして総合的にまとめました」(『三井記念病院'70』に掲載)

こうして施工は三井建設(現三井住友建設)・鹿島建設共同企業体、実施設計は日本設計事務所が担当した。昭和43年(1968)12月18日に起工式が行われた。

また、建設にあたっては医療活動に支障のないよう、先行工事としてプレハブの仮病棟が建てられ、既存病棟から患者を移転し、空室となったものから順次解体していく工程で工事は進められた。

そして、月曜会は「三井厚生病院拡充計画実行委員会」を設置した。同委員会の世話役となった三井不動産の田口純専務取締役は、「戦後はやむなく病院の敷地の一部を復興資金に充て、応急的な医療を行ってきましたが、これを良い病院に建替えることは懸案でした。それが月曜会加盟会社の賛同を得て、実現の運びとなりました。木本誠二院長も身命を投げ打って病院のために尽くすという身の入れ方で、誠に頼もしくありがたく思っています」と述べている(昭和43年(1968)9月5日付『三友新聞』に掲載)。

## 第1期工事出資26社(昭和45年10月1日現在、社名は当時のもの)

大阪商船三井船舶	日本製粉	三井石油化学工業
三機工業	北海道炭礦汽船	三井倉庫
昭和飛行機工業	三井銀行	三井造船
ゼネラル石油	三井金属鉱業	三井東圧化学
大正海上火災保険	三井建設	三井農林
東食	三井鉱山	三井物産
トーマン	三井信託銀行	三井不動産
東レ	三井精機工業	三井三池製作所
日本製鋼所	三井生命保険	(社名50音順)

### B C棟竣工、東洋一の高層病院に

昭和45年(1970)4月1日、第1期工事の完了と合わせ、三井厚生病院はこれまでの施療機関的な名称を脱し、広く医療に当たる意味を込めて、「社会福祉法人 三井厚生病院」から「社会福祉法人 三井記念病院」に改称した。

4月7日に竣工式、12日に修祓式が行われ、その後は各医療機器の設置や旧棟の各科移転、プレハブ棟の取り壊しが行われ、約半年後の9月28日、開院式が盛大に挙行された。

竣工にあたり、第1期工事出資26社代表の三井不動産・江戸英雄社長は喜びの言葉を次のように述べている。

「当院は太平洋戦争の戦火に遭い、加うるに財閥解体により三井家の資金援助も途絶したため、自力の再建、診療が続けられてきましたが、建物・設備は荒廃・陳腐化し、このまま放置すれば多年の輝かしい伝統と実績を有する当院の存続も危ぶまれる事態となりました。私ども三井系列26社は、この事態を憂慮



江戸英雄社長

し、当院創設の三井家の精神を継承し、共同出資により近代的高層病院を建設、名称を『三井記念病院』と改め、この度の開院の運びとなったことは誠に同慶の至りであります」(『三井記念病院'70』に掲載)

また、木本院長は開院前にあたって次の言葉を述べている。

「問題はこうした豪華な新病棟にふさわしい内容である。そうなると結局は人の問題である。要はその人の能力と熱意にあるのであり、1人で何人分もの仕事をカバーできる人もあれば、半人前どころか、却ってマイナスになる人もあるのが世間の実情である。新病棟移転に伴う無数の案件に決して一挙に解決されるものではなく、かなりの時日の過渡的な漸次(時)的な方式も止むを得ないことはもちろんである。これをどう乗り切るか、どう最終的な体系に移行できるかは、結局先に述べた人の問題に帰着するわけである」(清瀬 闊<sup>ひろし</sup>『下弦の月 三井記念病院とともに半世紀』に掲載)

新病棟はBC棟からなる地上13階・地下1階の鉄筋コンクリート造りで、延床面積2万1,284㎡、軒高は48.34m、塔屋2階の最高部は56.65m。都心に現れた巨大病院の偉容



「東洋一の高さを誇る高層建築病院」として話題となったBC棟

は当時、香港にある12階建ての「クイーン・エリザベス・ホスピタル」を凌ぐ高さで、「東洋一の高さを誇る高層建築病院」として話題となり、和泉町界隈では、「病院がなくなってホテルができたのか」とも言われた。

また、鉄骨部には高層建築では珍しい新工法「鉄板耐震壁」が採用された。これは地震発生の際、水平力の大半を壁が負担する構造にしたもので、強度・剛性は一般コンクリートの約10倍にもなる。B棟とC棟の間には防煙区画が設けられ、火災が発生した場合でも安全に隣の棟へ避難できるよう設計された。

ベッド数は378床（一般354床、結核24床）だが、大半が低所得者のために保険がきく病室となっており、全てに冷暖房が完備された。横臥した状態からボタンを押せばベッドは自由に傾斜し、新たに酸素吸入装置も導入された。

医療設備も国内唯一を含む最新機器を導入し、コバルト60放射線治療装置や心臓血管撮影装置など大学病院にも勝る機器を揃えた。診療要員も循環器外科の世界的権威である木本院長をはじめ、東京大学医学部を中心とした専門ごとの支援体制を整えた。

また、患者の多い消化器・循環器・呼吸器の三系統の病気についてセンター制を導入したことは全国で初めての試みとなった。これは「病院は生き物である」という木本院長の発案によるもので、センター長を置かず、各診療科部長6人による合議制で運営された。一方、新病棟では慣れないための不便もあり、特に8台あるエレベーターが全て上がってしまい待ちきれず階段を上る人も多かった。

診療科目は内科、健康管理科、神経科、小児科、呼吸器センター、循環器センター、消化器センター、外科、脳神経外科、整形外科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、歯科口腔外科、放射線科、麻酔科のほか、救急部、中央手術部、中央検査部を設けた。新病棟開院時の職員は医師65名、看護婦70名であった。

### 三井記念病院高等看護学院を開院

B C棟竣工の翌年、三井記念病院は看護婦養成のための「三井記念病院高等看護学院」を開院させる。三井記念病院は三井慈善病院時代から附属の看護婦養成所を設けていたが、戦中・戦後の混乱により、看護婦の養成を休止していた。

看護婦教育にも熱心だった木本誠二院長は、「集まってくる学生、教える先生、実習できる病院の三者が一体とならなければ、いい教育はできない」と関係者を説き、昭和46年(1971)4月、三井記念病院高等看護学院は2年課程・定員30名で開院した。初年度の学院長は羽田野茂副院長が兼務した。戦後に建てられた既存の新棟が校舎に充てられた。

昭和47年(1972)、木本院長の懇望により、山田里津学院長が就任する。山田学院長は日赤看護学校を卒業後、厚生省看護課で看護行政に携わり、千葉県初の看護学校設立にも尽力し、三井記念病院高等看護学院設立時も調査官として同学院を訪れていた。木本院長は、「日本一の看護学校を作りたい。そのために日本一の校長を迎えたい」と要請した。

それまで看護学院は病院の附属機関として病院役員が学院長を務めるのが通例であったが、山田学院長は国内で初めて看護職の学院長となった。

その後、三井記念病院高等看護学院は徐々に規模を拡大し、最盛期には定員200名に



三井記念病院高等看護学院の生徒たち(平成10年卒業アルバムより)

まで達した。平成16年(2004)の閉院までの33年間に卒業した生徒は約1,200名に達し、彼女たちは現在も三井記念病院をはじめ、医療・福祉など幅広い分野で活躍している。

### 三井建設で血液検査のデータ処理

新病棟完成から5年経った昭和50年頃、三井記念病院は血液検査などの生化学検査のデータ処理の一部を三井建設(現三井住友建設)で行っていた。内科・外科から持ち込まれる血液検査量は1カ月に約8万件に及び、病院のコンピューターだけでは対応できなかったため、近隣の神田岩本町に本社のある三井建設の協力を得て、空き時間に同社のコンピューターを借りてデータ処理していた。当時の中央検査部・清瀬 闊<sup>ひろし</sup> 部長(後の副院長)はその実情をこう語っている。

「何しろ量が量ですから、大変な仕事なんです。ミニ・コンピューターを導入したんですが、それでもおっつかない。そんな訳で三井建設さんのコンピューターを使わせてもらっているんです。ミニ・コンにインプットしたもの(紙テープ)を三井建設さんに持って行き、統計用のもの(磁気テープ)と報告書が作成されます。理想を言えば、電話回線で建設さんのコンピューターと接続できるようになればいいんですが、資金的に無理なようです」(昭和50年(1975)2月13日付『三友新聞』に掲載)

ちなみに2年後の昭和52年(1977)、三井建設と三井記念病院はマイクロコンピューターを利用したオンライン自動化臨床検査システム「TELAAS」を共同で開発。検査結果のデータ分析から検査報告書作成までをオンライン化した。

## 2. 第2期工事に向けて

### 三井グループ50社からの寄付

第1期工事のBC棟完成から6年後の昭和51年(1976)、新たにD棟を建設する第2



期工事開始のための寄付活動がグループ内で始まった。まず、三井銀行(現三井住友銀行)と三井物産は同年で創立100周年を迎えたことを記念して三井記念病院に5億円ずつ10億円を寄付した。これに伴い三井グループの社長会である「二木会」(昭和36年(1961)発足。第2木曜日に例会を行っていることから命名)23社のうち、銀行・物産を除く21社でも総額6億円を拠出した。

続いて大正海上火災保険(現三井住友海上火災保険)も昭和53年(1978)に創立60周年を迎えるのを記念して向こう3年間にわたって毎年5,000万円ずつ、合計1億5,000万円を寄付すると発表した。こうして第2期工事に向けた寄付金は集まり、昭和52年(1977)6月には三井不動産の中井武彦専務取締役を委員長とする「三井記念病院建設委員会」が設置された。寄付金は二木会以外の三井グループ各社からも寄せられ、最終的には50社から20億円に達した。

#### 第2期工事出資50社(昭和55年4月1日現在、社名は当時のもの)

大阪商船三井船舶	東レ・エンジニアリング	三井航空サービス
王子製紙	西日本電線	三井コークス工業
三機工業	日本製鋼所	三井鉱山
昭和飛行機工業	日本製粉	三井鉱山コークス工業
ゼネラル石油	日本ユニバック	三井コンクリート工業
大正海上火災保険	藤倉電線	三井情報開発
ダイセル化学工業	三井アルミナ製造	三井信託銀行
台糖	三井アルミニウム工業	三井精機工業
電気化学工業	三井海洋開発	三井製糖
東京芝浦電気	三井共同建設コンサルタント	三井生命保険
東食	三井銀行	三井石油開発
トーメン	三井金属鉱業	三井石油化学工業
東洋エンジニアリング	三井軽金属加工	三井倉庫
東レ	三井建設	三井造船

三井東圧化学

三井不動産

三井リース事業

三井農林

三井不動産建設

三越

三井物産

三井三池製作所

(社名50音順)

## D棟に看護学院を併設

昭和53年(1978)7月20日、D棟建設の起工式が行われた。総工費約20億円、施工は三井建設(現三井住友建設)・鹿島建設共同企業体が行うこととなった。当初の計画ではB C棟に続くD棟は13階建ての予定だったが、建築基準法の改正などにより、B C棟と同規模の病棟は建てられず、A・B・C・Dの4棟連結の構成からなる建設計画は見直さざるを得なかった。このため、A棟の建設は断念された。D棟は見直し、4階建ての予定としたが、病院の患者数増加などの理由から7階建てに計画変更され、合わせてB C棟の改修も行われることになった。翌昭和54年(1979)9月に上棟式を執り行い、昭和55年(1980)4月7日に竣工した。



看護学院を併設したD棟

完成したD棟は地下2階・地上7階、延床面積は5,983㎡。B C棟から薬局、人間ドック室、人口透析室、放射線室が移転したほか、手術室が増設され、さらにB棟とは各階で繋がれた。また、D棟の5階を1クラス40名収容できる看護学院とした。

竣工式には<sup>はすみしん</sup>荷見晋評議員副会長をはじめ、木本誠二名誉院長、羽田野茂院長、理事を務める三井不動産・江戸英雄会長、坪井東社長、三井銀行(現三井住友銀行)・小山五郎会長、三井信託銀行(現中央三井信託銀行)・生野専吉取締役相談役など三井グループ首脳陣が出席した。

羽田野院長は挨拶で次のように述べている。

「本日の4月7日という日は61年前、皇后陛下に行啓賜った記念の日でもあ

ります。また、10年前の4月7日にはBC棟が完成しており、その意味で今日は非常に当病院にとっておめでたい日であります。その日にD棟の完成とBC棟の改修を終え、救急患者の収容も便利になりました。看護学院では現在の看護婦不足解消のお役に立てるのではないかと考えております」(昭和55年(1980)4月10日付『三友新聞』に掲載)

さらに昭和58年(1983)には第3期工事として地上8階建ての看護学院棟が竣工し、三井記念病院は最新の医療設備と看護婦育成体制を確立していった。

### 「三井の天使」を除幕

D棟が完成した昭和55年(1980)、竣工を記念してD棟エントランスホールの中庭に19世紀パリで活躍した宮廷彫刻家・A・ゴーリーの大理石天使像が設置され、同年7月7日に除幕式が盛大に開催された。この天使像は第2期工事完成を記念して三井不動産と三井建設(現三井住友建設)から贈られたもので、元の名を「三天使」といい、中庭の3つの泉の隣に建てられた意味を含めて「三井の天使」と命名された。台座の「三井の天使」は三井不動産・坪井東社長の書によるもので、社長の孫・千香子ちゃん(当時4歳)の手によって、除幕された。



看護学院棟



三井の天使

## 終章 21世紀の最先端医療へ

### 1. 建替え工事計画を推進

#### 総合健診センター、三井陽光苑をオープン

時代は昭和から平成へと移り、三井記念病院はさらに医療・事務体制を充実させていく。平成5年(1993)、敷地内に地上3階の管理棟を新築し、経理・総務などの事務機能を集約した。翌平成6年(1994)には隣接する住友商事神田和泉町ビルの2階、3階に入居した。2階はX線室やCT室、超音波室など最新の機器を配置した総合健診センター、3階は図書室や院長室、各部長室とした。その後、平成18年(2006)12月に管理棟を解体し、事務部門は同ビル4階に移した。

また、社会福祉法人である三井記念病院は高齢者福祉にも力を注いでいる。東京都福祉局の公募により、高齢者専門病院、老人保健施設とともに高齢者福祉・医療の先駆的モデルを構成する施設の一つとして、平成14年(2002)5月、東京都江東区に地上4階、地下1階の特別養護老人ホーム「三井陽光苑」を開業させた。

三井陽光苑は最先端の特別養護老人ホーム施設で、個室150床(一般高齢者100床、認知症高齢者50床)、ショートステイ30床の全180床からなり、三井記念病院の医療支援の下、常勤医師が在籍するなど万全の対応が整っている。



総合健診センター・2階ロビー



三井陽光苑

## 建替え工事計画を発表

三井記念病院の対外的評価が高まる中、平成16年(2004)10月には世界三大格付け機関の一つであるフィッチ・レーティングスから有担保債務格付けで「A格」が付与された。「A格」は債務の信用リスクが小さいと予想され、債務履行の確実性が高いことを意味する。格付けは平均在院日数や他の医療機関からの紹介率など18項目の基準と財務諸表の評価により認定された。「A格」は事実上の国内トップクラスの病院として認められたことであり、世界的格付け機関による病院格付けでは日本第1号となった。

当時、設備の老朽化、また、電子カルテや高度医療機器などへの対応を図るため、全面的な建替を計画していた三井記念病院にとって、フィッチ・レーティングスによる「A格」認定は、追い風となった。そして、三井記念病院は平成18年(2006)10月3日が設立100年に当たるのを機に同年3月、「100周年記念事業」として総事業費約200億円の全面建替え工事計画を発表し、資金は三井記念病院の自己調達及び二木会をはじめとする三井グループ各社で分担拠出した。

## 三井記念病院建替え工事出資27社(平成18年4月1日現在、社名は当時のもの)

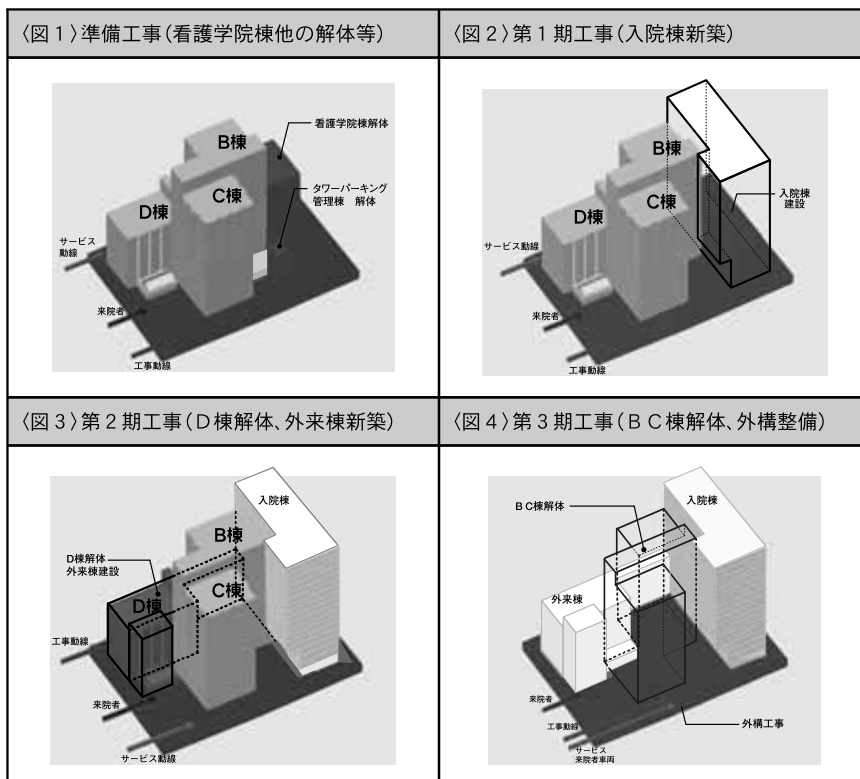
石川島播磨重工業	日本製鋼所	三井生命保険
王子製紙	日本製紙	三井倉庫
三機工業	日本製粉	三井造船
商船三井	三井化学	三井トラスト・ホールディングス
太平洋セメント	三井金属鉱業	三井農林
電気化学工業	三井住友海上火災保険	三井不動産
東芝	三井住友建設	三井物産
トヨタ自動車	三井住友銀行	三井三池製作所
東レ	三井精機工業	三越

(社名50音順)

## 2. 医療活動を続けながらの建替え

### 総事業費200億円の大計画

総事業費200億円の大規模な建替え工事は、工事期間5年、入院・外来の医療活動を続けたまま既存の看護学院棟、管理棟、D棟、BC棟を順次解体し、新たに入院棟・外来棟を建設するという大規模なものである。計画では、機能を混在したB、C、D棟の3棟構成から入院機能と中央診療機能を集約した「入院棟」と外来機能に特化した「外来棟」の2棟構成へと変更することとした。まず、看護学院棟及び管理棟、タワーパーキングを解体し、跡地に地上19階からなる入院棟を建設する。そしてBCD棟から入院患者を入院棟へ移転させ、その後、D棟を解体して跡地に入院棟と接続した地上7階の外来棟を建設し、最後にBC棟を解体する。これは病院建替え工事としては他に類を見ない大計画である。



三井記念病院建替え工事計画概要

る。

看護学院棟の解体により、三井記念病院高等看護学院は平成16年(2004)3月をもって閉院した。同年4月から共立女子短期大学に看護学科が開講され、33年間にわたる看護教育のノウハウが引き継がれた。また、管理棟の事務所は隣接する住友商事神田和泉町ビルの一部に移転した。解体工事は平成18年(2006)7月から3カ月間にわたり行われ、10月19日の起工式には田中順一郎理事長(三井不動産会長)や三井<sup>ひさしげ</sup>長生評議員会長(三井家同族会代表)、萬年徹院長など関係者110名が出席した。施工は鹿島建設



起工式で鍬入れする  
田中理事長

・三井住友建設共同企業体、設計・監理は日本設計、総合企画は三井不動産が担当した。

現行敷地内での都心病院建替え工事としては類を見ない規模であったが、千代田区が三井記念病院に隣接する和泉公園の使用を許可するなどの協力もあり、工事は順調に進められていった。

### 地上19階の入院棟完成

平成20年(2008)9月9日、起工から約2年の歳月を経て、建替え工事の要である地上19階・地下2階の「入院棟」が竣工を迎えた。病床数は482床、手術室は13室、延床面積は約2万8,900㎡。

同日、挙行された竣工式には、三井記念病院関係者や二木会・月曜会の三井グループ首脳陣が多数出席した。代表挨拶で萬年院長は、「100周年に当たり、21世紀にふさわしい病院建設へと踏み切りました。9月9日、重陽の節句というめでたい日に竣工を迎えたことは感無量で、職員一同にとっても大きな励みになります。本来の病院の姿となるまで、あと3年かかりますが、一丸となって皆さまのご期



竣工式で挨拶する萬年院長

待に添えるよう邁進して参ります」と喜びの言葉を述べた。

入院棟は低層部に中央診療機能、高層部に入院機能が集約された。高度医療、療養環境整備、運用体制の効率化、建物の安全性確保など様々な最新技術が採用されている。

高度医療では外科治療とカテーテル治療が同時に行える血管造影装置付ハイブリッド手術室や、最短0.35秒で1回転する最新鋭の320列C T撮影装置が導入された。手術室を11室から13室、I C U(集中治療室)を5床から7床、C I C U(冠疾患集中治療室)を3床から6床に増床したほか、H C U(高度治療室)も21床新設した。

各科病棟は9階から19階を使用。基準階を42床とし、療養環境の整備では、従来の6・8床室中心の病床構成から4床室の構成へ変更された。ベッド間の距離を離すことで、感染症の予防が図られ、また、看護師の作業場所も広く確保されることとなった。個室は67室から143室となり、個室率は約3割となった。最上階の23

室は全室個室、そのうち2室は特別個室となっている。便器は蓄尿する必要のない自動尿量測定便器を一部導入した。病室の天井は国内初めてのグリッドシステム天井を採用。照明やカーテンレールの移動を容易にするなど、フレキシビリティを重視してい



血管造影装置付ハイブリッド手術室



320列C T撮影装置



黒と白のモノトーンを基調とした入院棟  
1階ロビー



る。

また、搬送設備システムや電子カルテシステム等のIT導入により、効率化が促進された。搬送設備システムは薬剤部や中央材料室などから階を隔てた院内各所に薬や診療材料などを自動的に搬送する。

外観は都心施設との調和を図り、オフィスビルやホテルをイメージしたものである。バルコニーを設けず、低層階は黒と白のモノトーンを基調とし、病棟階は落ち着いた雰囲気とするなど、従来の病院とは一線を画すデザインとなった。1階には病院関係者に限らず利用できるコンビニエンスストアやレストランが設置された。工事が全て完了すれば、和泉公園のある南側から北側道路への通り抜けも可能となる。建物は制震構造を採用し、耐震性能を強化するとともに、大規模災害時の医療活動用に1階レストランには医療ガス設備を設置した。



平成20年9月に竣工した入院棟

## 次の100年に向けた高度医療

BC棟から入院棟への入院患者搬送は平成20年(2008)12月27日に行われ、最新病棟での診療が始まった。だが、建替え工事はまだ折り返したに過ぎない。D棟解体及び外来棟建設は平成21年(2009)1月から平成22年(2010)9月までの21カ月を予定しており、その後は11カ月かけ、BC棟解体と外構工事に移る。平成23年(2011)9月に全ての工事を終え、21世紀の医療にふさわしい病院が誕生する。

平成21年(2009)3月21日に開院100周年を迎える三井記念病院。三井八郎右衛門たか(高棟)みねが目指した医療福祉の精神は、関東大震災や空襲など幾多の苦難を乗り越え、三井グループに支えられながら次の100年へ脈々と受け継がれていく。

# 寄稿

## 戦後の三井厚生病院

(昭和45年まで)

三井記念病院元副院長 清瀬 闊<sup>ひろし</sup>

日本が初めて経験した敗戦のつけは、東京をはじめ殆どの全都市が灰燼に帰して決着したが、ここまで戦ったのかという虚脱感のみが残っていた。高い塀で震災は逃れても、空からでは三井厚生病院も例外ではなく、昭和20年(1945)3月10日の空襲で灰燼に帰したのであった。

GHQにより財閥が解体される寸前、三井財閥から3,000万円という、今で言えば300億円の金をくれるという連絡があったが、栗山重信院長の都合で1日遅れたため、GHQにより差し押さえられてしまった。当時の佐々木四郎理事(三井不動産社長)、林春夫理事(東京帝国大学医学部教授)、栗山院長らは口を揃えて「もう再開は無理である」と言っていた。

岩田正道産婦人科部長、白石謙作内科部長らは戦後の無気力時代を経て翌年、病院を是非残したいとの願望が強くなってきた。新任の荷見理事(元三井不動産)は東京帝国大学・田宮猛雄医学部長に後任院長派遣を強く要請したが、「院長を出すことは無理であり、岩田部長を院長にすることではどうだ」との返事を得た。ちょうど栗山院長は昭和21年(1946)、定年退職された。

同年春には仮診療所を開設。診療のための器具は看護婦が決死の思いで搬出して自宅に保管してあったものと、東京帝国大学医学部附属病院から貸し出しを受けたものであった。諸物資の欠乏・高騰が続く中、細々ではあったが、医療従事者の気概によって診療が開始された。

最初に復員してきた山門幸雄、中野祐雄ら医局員に続き看護婦も復帰し始め、漸次増えて総職員は30名くらいになっていた。昭和22年(1947)3月に病院の再建に見通しが出来たので、一旦全員を解雇し、改めて残ることを希望した人達を再雇用し、戦後の三

井厚生病院の時代に入った。

診療室は老若男女を仕切りのない一室で、机の両端で2人の医師が診るものであり、特に内科では上半身を裸にさせていたので、さすがに若い女性は少なかった。これは三井慈善病院の名残で、カーテンや戸棚で仕切ったのは昭和26年(1951)頃からであった。

手術室は別館の1階にあり、術前、術後は勿論、重症患者のレントゲン撮影のためでも、担架に乗せて1階から2階、3階と搬送しなければならず、その上げ下ろしは高齢の小使いさんの仕事であった。しかし、患者さんを落としたことなどは一度もなかった。

検査室は以前解剖室であった2号館にあり、タイル張りで水捌けのため、やや床が傾斜した所に大きな検査台があり、昭和25年(1950)になってもアルコールとクレゾールが各一本あっただけで、使われた形跡は全くなかった。その後、事務にきた竹内(現姓黒澤)侑子さんが専任になった。

剖検は検査室の検査台に死体を載せていた。病室から覗かれるので窓に新聞紙を貼って目隠しをしていた。これは昭和26年(1951)に剖検室が中庭の塀際に来るまで続いていた。解剖医は東京大学病理学教室に電話をすればいつでも来てくれた。病理医の援助は多大であり、病院の過去の歴史から関係が深かったからであった。

食堂は内科の地下にあり、患者の配膳は全部食養室と病棟手伝いで行っていた。盛り付けは病棟で行っていた。職員の食事もここで行っていたが、各自持参のものは勤務場所で食べていた。昭和26年秋、当時の朝日グラフに慶應病院の新しい病棟と、昼食用に廊下で練炭コンロの秋刀魚を焼く三井厚生病院を対比した皮肉な写真が出たことで全職員は悔しい思いをした。

トイレは男女共用で不潔感もあり、ベニヤ板製の黄色の扉に簡単な引っ掛け鍵がついているというだけだった。極めて不評であったが、直すこともなかった。

昭和26年(1951)、2階建て木造モルタル造りの新館(3号館)50床が出来たときは皆、大変喜んだものであった。新玄関の2階には院長室、部長室、本館1階の旧待合室には整形外科、事務室跡に小児科が新設され、さらに本館2階に眼科が置かれた。また検査

室、レントゲン室、手術室も改装された。動物小屋、解剖室などは中庭の高塀沿いに設置された。

病院には戦前からの三井一族の寄贈によるラジウム針が地下にあり、これは盗まれず焼け跡にも残っていて、外科領域の乳癌、婦人科領域の癌に使用されていた。これを持っている病院はレベルが高かったことを示すものであった。その半分を癌研究病院に貸与していたが、この代償や、その後三井記念病院建設時にどう処分されたかは不明である。時代の変遷と共にラジウムはコバルトに代わり、使われなくなったからでもあった。

病院の施設は最低でも医師は最高医療の自負は持っていたし、特に難しい病気の患者が多かった。患者の人権問題などは起こらなかった時代であったが、患者を大切にしていたし、患者さんも職員に対して敬意を払っていたことで、総じて評判は良かった。

昭和31年(1956)、ブロック造りの2階建て暖房付きの新館58床を新築し、計212床の病院になった。これを三井各社に割り当て、費用を出してもらったが、当時では既に時遅く配管暖房が普通で、三井の利用客は少なかったが、三井系の役員は結構利用していた。

新館以外ではなお暖房は練炭コンロ、達磨ストーブを使用していた。しかし、これで一応中規模病院としての地位はできた。

職員たちは、病院が少しずつ立ち上がっていく姿を実感していた。戦後は汚い病院と言われていたが、BC棟の建替え工事が始まり、いざ取り壊すとなると色々な思い出が吹き出て名残惜しく、最後の日にお茶の時間も作った。

だが、そのBC棟も今回、最新施設に建替わった。医療レベルを絶えず一級に保つことがいかに困難であるかがわかろうというものである。

こうした戦後の苦勞を乗り越えてきた方々もほとんどが鬼籍に入られた。あらゆる面で医療現場は当時とは様変わりしているが、「病人を治療する」という精神そのものは変わることはない。最先端の病院となっても、昔の慈善病院の本来の目的を忘れず医療活動に励み、社会に貢献することを念じている。